

292  
435

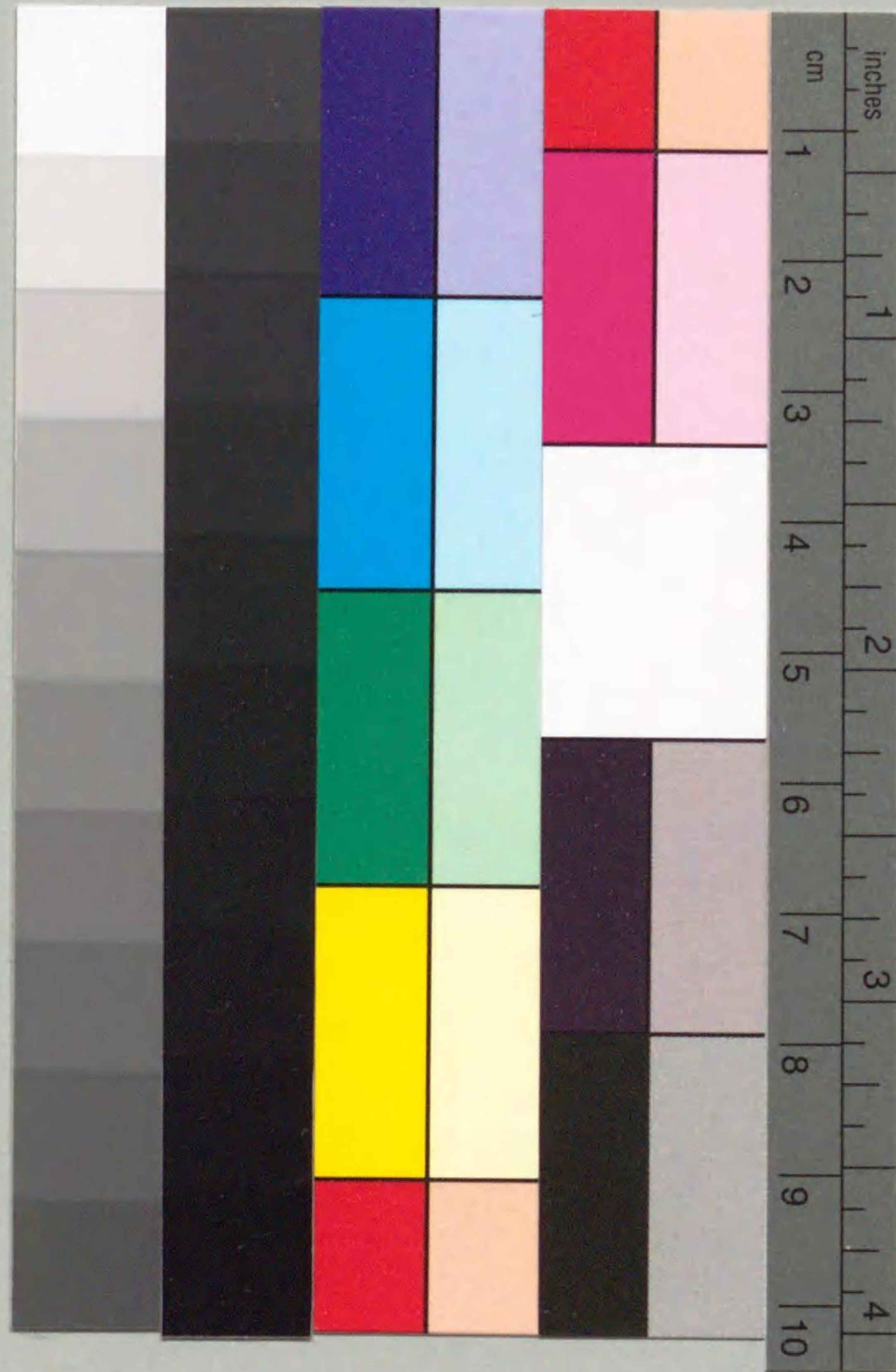
小學國史物語

古事記

新免忠著



東京紅玉堂出版









小學國史物語

[2]

古

新  
免

忠  
著

事

記

東京紅玉堂出版

大正

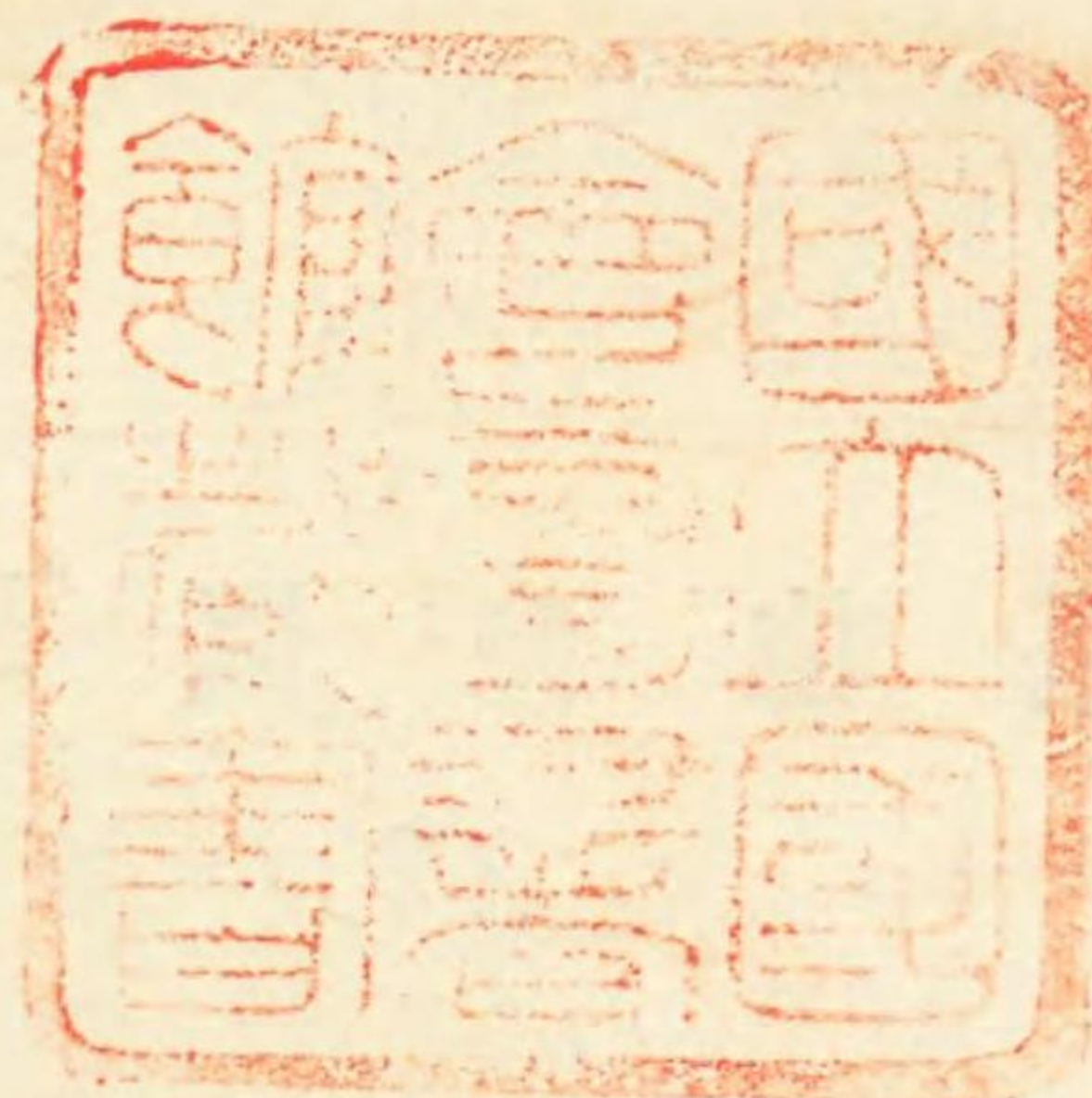
15. 2. 6

內交





26  
S-7



150398





の水い暗、とく視を戸井とふ、とうま波を水、が使召  
あはでるゐてつ映りきつはが神の男いし美變大、に面  
(玉の潮干と玉の潮満) 。かんせまり





うた、でつ行でめじばえ燃らかちつこに對反は火、りは變がき向の風にめたの火のそさるす  
(命の建倭)。たしまりなれ逃おを所い危、はちた命、れか開が路の方—うた



目次

一、	黄泉比良坂 <small>よもつひらざか</small>	.....	一
二、	天の岩戸 <small>あめのいはと</small>	.....	二
三、	八俣の大蛇 <small>やまたのおろち</small>	.....	三
四、	裸の兔 <small>はだかのうさぎ</small>	.....	四
五、	赤い猪 <small>あかのしほ</small>	.....	五
六、	雉のお使 <small>きじのおつかひ</small>	.....	六
七、	建御雷の神 <small>たけのみかづちのかみ</small>	.....	七
八、	三種の神器 <small>さんしゆのじんぎ</small>	.....	八
九、	満潮の玉と干潮の玉 <small>みちしほのたまひしほのたま</small>	.....	九
十、	八咫鳥 <small>やたがらす</small>	.....	一〇



十一、	沙本媛	.....	一六一
十二、	青葉の山	.....	一七四
十三、	倭建の命	.....	一八五

第一 黄泉比良坂

大昔の大昔、それはまだ天と地とがはじめて出来上つたといふ時、天の上の高天原といふところに、神さまがはじめて、ひとりお生れになりました。

この神さまこそ、實に、われ／＼日本人の、一番の御先祖の神さまでありまして、お名前を天の御中主の神と申上げます。

天の御中主の神がお生れになりますと、間もなく、第二番目の神さまがお生れになりました。この神さまは高御産巢日の神とおつしやいました。次にまた、神産巢日の神と言ふ神さまがお生れになりました。

これで、神さまが三人お生れになりました。



なにしる、そのときには、天も地も出来上つたばかりで、この地面も固まるどころか、油でも流したかの様に、どろ／＼として、ふは／＼と、水母のやうに浮かんでゐるのでした。

その中へ、葦の芽が吹き出るやうに、お二人の神さまがまたお生れになりました。宇麻志阿斯訶備比古遲の神に、天の常立の神といふ神さまです。

次にまた、お二人の神さまがお生れになりますと、こんどはそのおあとから、男神さまと、女の神さまとが、ふたりお生れになりました。その次にも、男神と女神、また其の次も男神と女神と言ふ工合に、お二人づゝ都合四度、八人の神さまがお生れになりました。

そしてそのおあとに、伊邪那岐の命といふ男の神さまと、伊邪那美の命といふ女の神さまがお生れになりました。

或る日のこと、天の御中主の神は、ほかの神さま方と何か御相談になつて居られましたが、やがてこのお二人の神さまを、おそばにお召しになつて、

「お前がた二人は、これから、あのどろ／＼としてゐる地をしつかり固めて、日本の國を作り上げよ」

と仰せになつて、お二人に立派な矛をひとつ、おさづけになりました。

伊邪那岐の命と伊邪那美の命は、つゝしんでおうけいたしますと、いたゞいた矛をお持ちになつて、雲の中にある天の浮橋といふ橋の上までおいてになりました。

下には、たくさんの雲の間を透して、とりとめもなく、どろ／＼と擴がつた下界が見渡されました。

お二人の神さまは、これを御らんになると、持つてお出になつた矛を、雲の中深くお下ろしになつて、力を入れ、下界をぐる／＼とおかさまはしになりました。



すると、どろ／＼してゐた下界は潮水となり、それが次第に濃くなつてきました。  
お二人がさつと矛をお引き上げになりますと、矛の先から、濃い潮水が、ぼたく  
と滴り、塩となつて、下界に落ちて行きました。

すると、見る／＼その塩が積つて、そこに一つの島が出来ました。

そこでお二人は、共に、はるか其の島にお降りになりますと、まづ真中に、大  
な立派な柱を立て、それを中心として、廣い／＼御殿をお立てになつてお住居となさ  
いました。

そして、お二人は色々御相談になつていよいよ國をお作りはじめになりました。

女神の伊邪那美の命は、男神の伊邪那岐の命に先立つて國をおつくりになりました。  
所が、お作りになつた國が、どうも思はしく出来上らず、わづかに淡島といふ島が出  
來たばかりです。

お二人の神さまは御心配になり、

「これではいけない。天の神さまがたに申上げてこやう」

と御相談になり、早速高天原にお上りになつて、どうしたらばよいてございませう  
と神々に申上げました。

そこで、高天原の神さま方は、うらなひをなさつた結果、

「これは、女が先に立つて、國を作つたからだ。男が何でも先に立つてやらなくては  
いけない。もう一度そこから改めて、一生懸命にやつて見よ」

と仰せになりました。

仰せをうけたまはつた二人の神さまは、早速島にお下りになりますと、こんどは、  
伊邪那岐の命が先にお立ちになり、女神の伊邪那美の命はすべて、男神のあとにお従  
ひになりました、お力添へになりました。



すると、天の神々が仰せになつた様に、こんどは、よい國々が出来上りました。  
まづ一ばんさきに淡路島を、次には伊豫、讃岐、阿波、土佐の四つの島でお固めに  
なつた四國の島、その次に、今九州と呼んでゐる筑紫の國を、その次に、壹岐の島、  
津島、佐度が島の三つの島をおこしらへになりました。  
さうして、その次に、一番大きな、今の本州である大倭豊秋津島をお作りになり  
ました。

これで、大体日本の國が出来上りましたが、島の數が、淡路島からかぞへて八つあ  
ります。そこで、また日本のことを大八島國とも呼んでゐます。  
かうして、國をすつかりおこしらへになりますと、其の次には、おほぜいの神さま  
をお生みになりました。

其の神さま方の中には、風の神さま、木の神さま、山の神さま、海の神さま、川の  
神さま、霧の神さまなどがおいてになりました。  
所が一番おしまひに、丁度三十五人目の神様をお生みになつた時、其の神さまは火  
の神さまだつたので、おいたはしいことに伊邪那美の命は、お体にひどい火傷を遊ば  
しまして、それがためたうとうおかくれになりました。

伊邪那岐の命は、  
『あゝ可哀想に、妻の神よ。この子を生んだばつかしにだいじなお前をなくしてしま  
つた』  
とお嘆きになつて、お空骸にすがつて男泣きにお泣きになりました。そして涙なが  
らに、伊邪那美の命を出雲の國と伯耆の國との國境にある比婆の山に、手厚くお葬り  
になりました。

お生れになつた火の神さまは迦具土の神とおつしやいました。



伊邪那岐の命は、お嘆きとお腹立ちのあまり、お佩きになつてゐる十拳劍をお抜きになつて、迦具土の神のお首を切つておしまひになりました。それでも命のお嘆きはやまず、もう一度、女神の伊邪那美の命をば訪ねて、お會ひにならうと御決心になりました。

その時、伊邪那美の命は、比婆山のみ陵から、黄泉の國と云ふ、死んだ人の行く眞暗な國へお出てになつて居りました。

そこで、伊邪那岐の命は、はる／＼と黄泉の國をさして御出かけになりました。命がいよいよ黄泉の國の入口にお着きになつて、お呼びになりますと、伊邪那美の命は戸をあけてお出むかへになりました。

伊邪那岐の命は、うれしく思召しになつて、

『いとしい妻の命よ。お前とわしとが作つた國がまだ出来上らないでゐる。もう一度

歸つてくれないか』

と、親しく女神の命に仰せになりました。

すると伊邪那美の命は、

『悔しいことをいたしました。それならば、もつと早く来て下さればよいのに、私はこの黄泉の國で、死人の食べるものを食べてしまひましたから、もうごいつしよに歸ることは出来ずすまい。ですけれども、いとしいあなたが、かうやつてわざ／＼お出かけ下さつたのですから、何とかして歸り度うございます。ひとつ、黄泉の國の神たちに相談して見ませう』

とおつしやつてお立ちになりましたが、また、

『しかし、其の間どんなことがあつても、決して私の体をごらんになつてはなりませんよ』



と固く言ひおいて、そのまゝ御殿の奥におはひりになりました。

伊邪那岐の命は、そのあとに立つて待つていらつしやいましたが、伊邪那美の命はちつとも出ていらつしやいません。たうとう待ち切れなくなりましたので命は左の鬢におさしになつてゐた櫛の齒を一本お折りになつて、それに火をお點しになり、わづかな明りをたよりにして、闇を、手さぐり足さぐりしてお進みになりました。

いよく御殿の奥にお出てになりました所、深い岩屋の間に女神らしいお姿が見えます。櫛の火をかきたてかきたて、近よつておいでになりますと、それはまさしく女神でいらつしやいましたが、そのお姿といつたらたいへん、命は思はず目をそむけておしまひになりました。

体はべとくに腐れくづれて、その中には、うよく蛆が湧いてゐるのです。

その上お頭と、胸と、お腹と、下腹と、両手兩足にひとりづゝ、それはくこは顔をした雷が八人、うづくまつたまゝ命を睨めてゐます。

命は、あつとばかりにお驚きになつて、元來た道をどんくお逃げになりますと、女神はその時、

『あれほど申上げておいたのに、御覽になりましたね。この醜い姿をごらんになりましたね。人に恥をかかせてあゝ、ほんとにくやしい』

と齒がみをしてお怒りになりましたして、早速、黄泉の國の鬼女たちをお呼びになり、『はやく、あの男神をつかまへておいで』とおひつけになりました。

鬼女たちは、凄い眼をむきだし、恐ろしい聲で叫びながら、命のおそば近く追つて來ました。

そこで命は、髪飾につけてあつた黒の蔓草の葉を抜きとつては、後ろに投げつけ



投げつけ、お逃げになりました。さうすると、地面に落ちた蔓草は、葡萄の木となつて、たちまち房々とした黒葡萄の實がなりました。

そこまで追つかけてきた鬼女どもは、葡萄を見ると、役目も忘れて、葡萄の木にとりつき、むしやむしやと取つてたべはじめました。

その間に、伊邪那岐の命はどん／＼お逃げになりましたが、鬼女どもは葡萄をたべ終ると命がもう遠くへ逃げていらつしやるのを見て、

「おのれ、また」

と、またもや追ひついて来ました。

命は

「これは、たいへん」

と、こんどは右の鬢におさしになつてゐた櫛をお抜きになり、折つては投げ、折つ

ては投げながらお逃げになりました。すると、こんどは其の櫛がみんな筍になつて何本も何本も、によき／＼と生へました。

鬼女どもは、そこまで来ると、また、筍を端から抜いてむしや／＼とたべはじめました。

命は其の間に、足にまかせてどん／＼お逃げのびになりました。やれ／＼と後をふりかへつて御覧になると、こんどはどうです、たくさん鬼の軍勢が、雲の如く追ひせまつてくるではありませんか。

これは、女神が、鬼女どもは足は強いが、食ひ辛棒で、智慧が足りないから、とてもだめだとお考へになつて、お体にうづくまつてゐた八人の雷神に、千五百人の鬼の軍勢をおつけになつて、お追はせになつたのです。

しかし、勇敢な伊邪那岐の命は、少しも怯まず、お腰の十拳劔を抜きはなち、後へ



来る悪鬼どもを、切り拂ひ切り拂ひ、黄泉比良坂といふ坂の下まで逃げていらつしや  
いました。

見ると坂の下に一本の桃の木があつて、たくさんの實がなつて居ります。

命は、いきなり其の桃の實を三つお取りになると、追つかけてくる軍勢を目がけて  
たてつゞけに、びゆうくと、力一杯、お投げつけになりました。

すると、さしもの軍勢も、たちまち勢くじけて、みんな散りくりに逃げて行きま  
した。

命は、ほつと息をおつきになると、桃の木にお對ひになり、

「桃の木よ。ほんとに有難う。そして、これからさき、日本中のものが誰でも苦しい  
目にあつてゐたら、今私を助けてくれた様に、助けてやつて呉れ」

と仰言つておよろこびになりました。そして、其の桃の木に、大神之實の命といふ

名前をつけておやりになりました。

さて、女神の伊邪那美の命は、千五百の軍勢がまただめになつてしまひましたので  
最後に今度は御自分ひとり追つかけていらつしやいました。

男神は早速、そこにあつた千引の岩といふ大きな岩を、えいとばかりにお抱え  
になると、坂の真中にお下ろしになり、路を塞いでおしまひになりました。

女神は、その岩が邪魔になつて男神に近づくことが出来ません。残念に思召しにな  
りましたが、どうすることも出来ませんので、仕方なく、千引の岩を間にさしはさん  
で向う側の命にお對ひになり、

「わが夫の神よ。ではこのお恨みに、あなたの國民を、一日に千人づつ、きつと殺し  
てさし上げますから、よく覚えていらつしやいました」  
と申されました。



命は、それをお聞きになると、

「わが妻の神よ。お前がそんなことをするのなら、なにこつちは、日本中に一日に、千五百人の子供を生ませるから、お前もそのつもりでゐなさい」とお嘯きになつて、そのまゝさつさとお別になつてしまひました。

命は、

「あゝ、汚ない所へ行つてゐて、氣持が悪かつた。早く体の穢れを洗ひ取つてしまは

ら」とおつしやつて、九州の日向國にある阿波岐原といふ河原にいらつしやいました。そこには、きれいな川がながれて居りました。

命は早速、まづお持ちになつてゐた杖を、ごろりとそばへお投げすてになると、其の拍子に、一人の神さまがひよつこり、お生れになりました。

次に帯を、お解き捨てになると、同じ様にまた神さまがお生れになりました。次に下袴、着物、下帯、お冠、両手にはめていらしつた腕環を、順々にとつてお投げになると、其の度毎に、神さまが一人づゝ、お生れになりました。生れた神さまの數はみんなて十二人です。

命は、そのまゝ、川のふちにお立ちになりましたが、川の流をごらんになり、

「上の方は流が急だし、といつて下の方は少し流れが弱すぎる」

とおつしやつて、丁度、流れの工合のいい中頃の瀬におはひりになりました。そして、お体の穢れをさぶくとお落としになりますと、その穢れによつて、また神さまがおふたりお生れになりました。

これは穢れの神で、縁喜が悪いので、それを直さうと思召しになつて、命はさらに三人の神さまをお生みになりました。



それから、水の底にもぐつてお洗ひになりますと、またお一人、中頃でお洗ひになるとまたお一人、水の上にお出になつてお洗ひになるとまたお一人、都合三人の神さまがお生まれになりました。

そこで、命はこんどはお顔をお洗ひになりました。左の目をお洗ひになると、女神がお一人、右の目をお洗ひになると、男神がお一人、お鼻をお洗ひになると、また男神がお一人お生れになりました。

命が御らんになりますと、左の目からお生れになつた女神は、實に美しいく神さままで、何とも言へない貴い光りが、そのお体からさしてゐるのです。また最後にお鼻からお生れになつた男神は實にすばらしい、つよさうな、男々しい神さまです。

はじめの女神を天照大御神、次の神様を月讀の命、最後の男神を須佐之男の命と申します。

伊邪那岐の命は、すつかりお喜びになり、にこくと、

「今までのうちで、一番よいこともたちだ」

と、おつしやつて、お頸にかけてあつた玉のお頸飾をおはづしになり、天照大御神にお向ひになつて、

「お前は、高天が原を治めよ」

と、お言葉を賜ひました、そして、貴いその頸飾りを天照大御神のお手にお渡しになりました。

玉のお頸飾りは、ゆらくと揺れて、何ともいへない貴い、快い音をたてました。

次に命は、月讀の命に、

「お前は、夜の國を治めよ」

と仰せになり、



最後に須佐之男の命に、

『お前は、大海原を治めよ』

と仰せになりました。

## 第二 天の岩戸

天照大御神と、弟様の月讀の命は、お父さま伊邪那岐の命のお言ひつけ通りに、それぞれ高天原と夜の國とをお治めになりました。

ところが、一番下の須佐之男の命はお父さまの言ひつけを少しもおききにならないで、お治めになるべき大海原もほつたらかしてす。

それだけならまだいいのですが、毎日々々大きな聲で、わん／＼わん／＼と泣いていらつしやるのです。それが、長いお髯が胸の上まで垂れ下るほど、大きく御成人になつてからも、まだやまないのです。のみならず、だん／＼はげしくなり、しまひには、青々と茂つた山の草も木も、須佐之男の命のために泣き枯らされてしまひました。



また、そのお泣きになる様子は、まるで火のつく様でしたから、河の水も、海の水もみんな泣き乾されてからからになつてしまひました。

國中がこんなさはぎですから、でなくても折があつたら悪さをしてやらうと思つてひそんでゐた、悪神どもは、得たりかしくしと、一齊にさはぎだし、したいはうだいの悪さをやりだしました。そのために、國中いたるところでありとあらゆる災がおりました。

これをごらんになつたお父さまの伊邪那岐の命は、

『一体、なんだつてお前はわたしの言ひつけたことを、素直にやらないのか。そしていつまでも、子供の様に何をわん／＼泣いてゐるのだ』

ときびしく命をおとがめになりました。

所が、須佐之男の命はまだ泣きながら、

『わたしは、お母さまのお國へ行きたいから泣くのです』

とだだをこねて言ふことをおき／＼になりません。

お母さまの國とは例の黄泉の國です。

伊邪那岐の命はこれをお聞きになると、たいへんにお腹立ちになり、

『お前がさう言ふことを言ふのならば勝手にどこへでも行け。もう此の國にゐることはならん』

とおつしやつて、ふたたび須佐之男の命のことはおかまひになりませんでした。と

ころが、須佐之男の命は平氣で、今まで泣いていらしたのをおやめになると、

『それならば、これから姉さまの天照大御神においとま乞ひをして來よう』

と仰言つて、高天が原をさしておのぼりなつていらしやいました。

ところが、大男で力の強い命が、足にまかせてぐんぐんいらつしやるので、山も川



も、ひとつのこらずめりめりと搖ぎ出し、世界中の地面は、地震の様にぐらぐらと動き出しました。

この物音は、大空の高天が原にまでひびきわたりました。お驚きになつたのは天照大御神で、ごらんになりますと、大手をふつて、弟さまの須佐之男の命がのぼつていらつしやいます。

『これはきつと、わが高天が原の國を取りに來たのにちがひない』

とお思ひになると、天照大御神はすぐさま、お身支度をなさいました。まづ、ふさくとした髪の毛を、男の髪にお纏きになり、左右の鬢と、左右の腕には、八尺の勾玉といふ貴い玉飾をおつけになり、また背中には、千本の矢をさしたやなぐいと、五百本の矢をさしたやなぐいとを、お背負ひになり、そして左手に立派やかな臂あてをおはめになつて弓を突きたて、兩足に力を入れ、大地を踏みしめく、お立ち出てに

なつたさまは、實に男々しい、神々しい御武者振りです。

そして、足をお踏みになる強いお力のために、さしも固い大地もめりこんで、其のくづれた土が雪の様にとび散りました。

やがて上つておいてになつた須佐之男の命をごらんになると、大御神は大音上に、おとがめになりました。

『須佐之男の命、お前は何用あつてのぼつてきた』

すると命は一生懸命になつて、

『わたしは決して悪い野心があつてまゐつたのではありません。阿父様が、わたくしに、なぜ泣いてゐるのかとお尋ねになつたので、阿母さまの國に行きたいからですと申上げたらば、大變お怒りになつて、もう此の國には置いてやらぬからどこへでも行けとおつしやつたのです。それで、お姉さまにおいとま乞ひにきたのです。下心があ



つたわけではありません』

と申し上げました。しかし、天照大御神は御油断なさらず、

『それでは、お前が少しもやましくないと云ふ證據を見せてほしう』

と仰せになりました。

命は、

『ではお互ひに子を生んで身の明りをたてませう。心の清い私がどんな子を生むか見て下さい』

と立派に御返答なさいました。

そこで二人は、天の安河と言ふ河の兩岸にお別れになり、各々神々にお祈りをこめて子をお生みになることになりました。

まづ天照大御神は、須佐之男の命のおつけになつてゐた十券の劍をお取りになり、

それを三つにお折りになつて、天の眞名井といふ井戸の水でさらさら〜とお洗ひになると、それをかり〜とお噛みになり、ふつと霧といつしよにお吹きになりました。

するとその霧の中に一人の女神が姿をあらはしました。と同時に又一人の女神があらはれ、又そのあとから、一人の女神があらはれました。丁度三人の女神がお生れになりました。

一方、須佐之男の命は、天照大御神の左の鬢のおかざりにおつけになつてゐる勾玉をお取りになり、やはり天の眞名井の水でさら〜といふ音をさせてお洗ひになるとかり〜とお噛みになつて、ふつと霧をお吹きになりました。

すると、その霧の中に一人の男神がお生まれになりました。この男神は天之忍穗耳の命と仰言る神さまです。

今度は、右の鬢におつけになつてゐる勾玉をお取りになつて、やはり天の眞名井の



水でお洗ひになり、かりかりとお噛みになつて霧をお吹きになると又男神が一人、次にお鬢の勾玉を、噛んでお吹きになると、一人、また兩腕の勾玉をお取りになつて、霧をお吹きになると、それ／＼お一人づゝの男神がお生れになりました。つまり天照大御神の勾玉からお生れになつた神さまは都合五人です。

そこで天照大御神は、須佐之男の命にお向ひになり、

『お前が吹いて生れた五人の男の子どもは、わたしが持つてゐるものから生れたのであるから、五人はわたしの子である。私が霧を吹いて生れた三人の女の子どもは、お前の持つてゐるものから生れたのだから、お前の子どもである』

と仰せになりました。

須佐之男の命は、大威張りです。

『お姉さま、ごらんなさい。私に悪心が無い證據には、私の子どもはみんな、美しい』

女神ぢやありませんか。この勝負は私の勝ちです。どんなものです』

と鼻たかだかとおつしやつて、大變なお元氣です。

そして、うれしさに、ぢつとしていらつしやることが出来ず、調子にのつて、また大腕白をなさいました。天照大御神のおつくりになる田のあぜ道を踏みちらかし、せつかく水を通してある溝も土で埋めておしまひになるし、さうかと思ふと、大御神が毎年、はじめてのお米を召上る御殿に、うんこをひり散らかすといつた様な、お行儀の悪いことをし放だいです。

高天が原の神々は、おどろいて、これを天照大御神に申し上げました。

しかしお情ぶかい天照大御神は、みんなをお制しになつて、

『ご殿を汚すのは、お酒に酔つてしたことに相違ない。また田のあぜをこはして溝を埋めたのは、折角の地面をもつたい無いと考へて、平にならすつもりでやつたことで



あらう。弟は決して悪い心ではないのだから』  
と仰せになりました。

しかし命は、こんなにまで底つて下さる大御神のお心持には一向かまはず、悪さはいよくつゝのるばかりです。

丁度、大御神が機織部屋におでましになつて、御自分のお召物を機織女に織らしておいでになつてゐた時です。須佐之男の命は、生きてゐる馬の皮を無残にもはぎとり機織部屋の屋根に引ずり上げると屋根を破つて、血だらけになつたその裸馬を、いきなり部屋の中へ投げこんでしまひました。

さあ、中にいらしつた大御神をはじめ、機織女も、びつくりしたのしないのつて、大變なさはぎです。可哀想に機織女は、おどろいて逃げやうとする途端、機の梭がお腹にささつて、たうとう死んでしまひました。

あまりのことに、大御神はお聲も出ません。しばらくじつとしていらつしやいまして、平氣で立つてゐる命をごろんになると、腹立たしさと、悲しさがこみ上げてきて、そのまゝ、天の岩屋と言ふ石室におはひりなると、岩戸をびつたりお閉めになつたさき、貴いお姿をすつかりかくしておしまひなさいました。そして、いくらたつても隠れたさき、お出ましになりません。

さあ、日の神である大御神が姿をかくしておしまひになつたのですから、天も地も忽ち、まつ暗やみになつてしまひました。いくら待つても、朝になつてくれません。世界は、朝も夕方もない、夜ばかりになつてしまつたのです。

さうすると、暗やみにつけてこんで、引込んでゐた悪神どもは得たりかしこしと一齊に、到る所てさはぎだして、悪さをやりはじめました。ために世界中に、ありとあらゆる災がおこりました。



高天が原の神々の御心配と言つたらありません。この世界の大事を救ふには、どうしても、天照大御神に岩屋の外に出ていたゞいて、元の様に明るいく々光りて照らしていたゞかなくてはだめです。

どうして、大御神を岩屋からお出し申すか、たくさんの神さまがたは、安の河原にお集りになつて、御相談になりました。

其の神さま方の中に思金の神と言ふ神様がありました。此の神さまは、一番智慧のある、かしい神様でした。其の折にも、いゝことをお考へつさになりました。

みな神々は思金の神の御指圖にしたがつてまづ第一に、鶏をたくさん方々から集めてきました。また天の安河の上流から固い石を運び、天の金山から鐵を取つてきました。そして天津眞浦と言ふ上手な鍛冶屋をお召しになり、其の固い石を金敷とし其の鐵で八咫の鏡といふ立派な鏡を作らせました。また玉の祖の命と言ふ者に八咫の

勾玉をたくさん作らせました。

又一方では、天の香久山といふ山から、一本の榊の木を、根ごと抜いてこさせて、今の八咫の勾玉を上枝にかけ、中程の枝に八咫の鏡をかけ、下枝には白や青の布をつりさげました。

これですつかり用意がすむと、集めておいた鶏を全部岩屋の前によせて、一齊に鳴かせて、ときを作らせました。

さうしておいて、一人の神さまが榊を持って天の岩戸の前にお立ちになると、も一人の神さまが、聲ほがらかに祝詞を上げはじめたのです。

鶏はさつきから引きりなしに鳴いてゐます。

祝詞がはじまると、手力男の神といふ力強の神さまが一人こつそりと、岩戸のかけにかくれてお立ちになりました。



そして、岩屋の前に空樽を伏せ、天の宇受賣の命といふ女神に、葛の蔓を襷にかけさせて、其の上で踊らせました。

宇受賣の命は、盛になく鶏のこゑと、朗々とした祝詞のこゑとに包まれて、一生懸命に踊りだしましたが、段々段々夢中になり、踊り狂つて、胸も、お乳もまる出しとなり、しまひには可愛い、お臍まで出して、くるくると踊りはじめました。

これを御覧になつた何千といふ神さまは、思はずどつと吹き出し、お腹をか、へ、ころげまはつてお笑ひになりました。何しろ何千、何萬といふ神さまですから、その笑ひ聲は高天が原中に響きわたりました。

天照大御神は岩屋の中においてになりましたが、岩屋の外からは、時ならぬ鶏のこゑがきこえてくる、だれか祝詞をあげてゐる、さうする内に、大きな神々の笑ひ聲がひびいてきたので、何だらうと思召しになつて、そつと岩戸を細目にあけてごら

んになると、お目の前で、宇受賣の命が踊り狂つてゐます。

不思議にお思ひになつて、大御神は、

「私がこゝにこもつてゐれば、天も地もまつ暗な筈なのに、お前は何が面白くて、そんなに踊り狂つてゐるのか。そして、ほかの神々も、一体何をあんなに笑ひ興じてゐるのか」

とおたづねになりました。

すると宇受賣の命は、

「あなたよりも、もつと貴い神様がにおいてになりましたのです。みんなはそれをよろこびあそんで居るのでございます」  
と申し上げました。

「もつと貴い神さま——」



天照大御神は思はずお目を見はつた時、例の、榊を持つていらした一人の神が、榊を大御神の前に近よせました。その時大御神は御自分の目の前に、かうがうしい女神の顔があらはれたのを御覧になりました。

これは勿論、榊の枝にかけておいた八咫の鏡に、大御神ご自身の御顔が寫つたのです。

それとは知らず大御神は、

『おや、これはだれ』

と、思はず戸の間から外へ少しお出ましになりました。

と全時に、待ちかまへていらした手力男の命が、お手を取るが早いか、大御神をすつかり外へお引出し申しました。

すると直ぐに、榊を持つていらした神が大御神の後へおまはりになつて、岩戸に注

連を張り渡し、

『どうか、これから内へはおはひり下さいますせんやうに』  
と申し上げました。

神々の御苦心も、たうとううまく成功して、世界中はまた元の通りに明るい晝となりました。神々ははじめて安心の胸をなておろしました。

そして、懲しめのため、須佐之男の命の御身代もすつかりお取り上げになり、その上、長い立派なお髯も切り取り、手足の爪まで抜き取つて、下界へ追ひ下してしまひました。

須佐之男の命は、下界へ追ひ下される時に、お腹がお空さになつたので、大氣津比賣の命といふ女神に、何か食べるものを呉れとおつしやいました。

大氣津比賣は早速承知して、鼻の穴や、口の中から、色々の食物をお出しになつて



それをお料理なすつて、命に差し上げました。

須佐之男の命はそれを御覽になると、

『そんな、鼻や口から出したものか食べられると思ふか』

と仰言つて、いきなり劔を抜いて、大氣津比賣の命を殺しておしまひになりました。

そして、どんく〜と下界へ下つておいてになりました。

殺された大氣津比賣の命の死骸には、頭に蠶が出来、兩方の目に稻が實り、耳に粟がなりました。また鼻には小豆、お腹には麥がなり、背中に大豆がなりました。それを、例の神産巢日の神がお取りになつて、日本の國の穀物の種となさいました。

### 第三 八俣の大蛇

須佐之男の命は、たうとう高天が原を逐はれて、下界へおりていらつしやいました。

お着きになつた所は、出雲の國、肥の河の河上、鳥髪といふ所でした。

まだ様子がわからないので、命は、しばらく肥の川のふちに立つて、ぼんやりながめておいてになりました。

すると、河の水に、何んだか流れてきたものがあります。よくごらんになると、それは箸なのです。

命は、

『こりやあ、箸が流れてくるところを見ると、この河上には、人が住んでゐるにちが



ひないぞ』

と思召しになつたので、勇氣百倍、河上の方を、あちこちと尋ねながら、歩いていらつしやいました。

すると或る所で、何やら人ごゑがするのを聞きになりました。

近よつてごらんになると、それは一人のお爺さんと、お婆さんが、娘を間に坐らせて、しきりに泣いてゐるのでした。

命は不思議にお思ひになつて、三人のそばへおよりになり、

『これく、お前たちは一体何といふものだ』

とお尋ねになりました。

すると、しばらくは、三人とも、泣きつゞけて居りましたが、やがて、そのお爺さんが顔を上げ、

『はいく、私は、此の國の大山津見といふ神の子で、足名椎と申すものでございす。また、この妻は手名椎、娘は櫛名田姫と申します』

とお答へいたしました。

すると、命は、

『さうか。しかしお前たちは、たいへん泣き悲しんでゐる様だが、一体どうした譯なのか。わたしに話して見よ』

と、ねんごろに、仰せになりました。

お爺さんは、

『どうぞお聞き下さいまし。私には元八人の娘がございましたが、毎年々々、高志といふ所から出てくる八俣の大蛇といふ大蛇のために、食べられてしまひました。おしまひに残つたこの娘も、こんどは、いよく取られてしまふのです。もう大蛇の出で



くるのも、間はございますまら』

と言つて、またさめくくと泣くのです。

命は、

『その八俣の大蛇といふのは、どんな格好をしてゐるか』

とお問ひになると、お爺さんは、

『はい、その大蛇の目と申しますのは、まるで熟した酸漿の様に眞赤で、からだは一つですが、頭と尾が、八つづゝあるのです。そして体中に、苔がむして、檜や、杉の木が生へてゐます。その長さは、八つの谷、八つの山をとりまくことが出来ます。お腹は、いつも、たゞれて、血で眞赤です。二目と見られない、それはくゝ恐ろしい奴でございます』

と申し上げました。

須佐之男の命は、お爺さんの言葉にぢつと耳をかたむけておいてになりましたが、

やがて、何事かお考へになつて、

『この娘は、お前の娘だと言つたが、ひとつわたしのお嫁に出来ないか』

と仰言いました。

しかし、そのお爺さんは、まだ須佐之男の命であると言ふことを知らないので、

『それは、差上げましても、よろしうございますが、恐れながら、あなたさまは、一体どなたでございますか』

と恐るゝおたづね申上げました。

命は、

『わしは、日の神の天照大御神の弟にあたる須佐之男の命といふもので、いま大空から降りてきたのだ』



と仰せになりました。

すると、お爺さんの足名椎は、

『さういふ貴いお方でございましたか。娘は差し上げますでございます』  
と申し上げました。

命は、櫛名田姫を、おもらひになりますと、まづ姫を櫛に化けさせておしまひになり、命の鬢におさしになると、足名椎と手名椎とお向ひになつて、

『お前たちは、これから、念を入れて、上等のお酒を作りなさい。それから、こゝに垣をぐるりと作つてそれに八所、門をつけなさい。そしてひとつの門の中に棧敷を作り、こしらへたお酒を大樽に入れて乗せてあげ』  
とお命じになりました。

そこで、足名椎と手名椎とは命の仰言つたとほりに、一生懸命になつてお酒を作り又垣を作つて、門を八つあけると、そこに棧敷を設け、大樽のふたをはづして、そなへました。そして、その中へ、作つたお酒をなみくつといっておきました。

さうさしておいて、命は待ちかまへていらつしやると、案の上、恐しい、大きな大蛇が、八つの頭を持ちあげ、八つの尾で大地を物すごく打ちながら、向うの山かげからのそりくつと出てきました。

命は劔の柄に手をかけて、おつと見ておいてになると、大蛇は、垣の前へ來ると、忽ち、その恐ろしい頭を、八つの酒樽の中へ落とすと、息もつかず、忽ちそのお酒を飲み干してしまひました。

いくら、強い大蛇でも、これだけのお酒をのんでしまつたのですから、たまりません。忽ち酔はらつて、そこへ大きな頭をごろくつと八つならべると、前後も知らず、ぐうぐうと寝こんでしまひました。



命は、大蛇のすつかり寝てしまつたのを、見ますと、忽ち、お腰の十拳劔をお抜きになつて、大蛇の首を、片つばしから撫で切りになさり、尾までずた／＼に切りさいなんてしまひました。

所が、尾をお切りになるとき、命の劔がかちりと音がして、刃が少しかけました。そこで尾を切りひらいてごらんになると、鋭い、一本の劔が出てきました。

命は、不思議な劔だと思ひになつたので後になつてから天照大御神に奉りました。之れが後世、草薙の劔といふ劔になつたのです。

兎にかく、大蛇は、命の御武勇のために、退治されてしまつたので、親子のよろこびと言つたらありません。

殺された大蛇の血は、どく／＼と流れて、みんな肥の河に注いだため、河の水は一面に真赤になつてしまひました。

こゝに、須佐之男の命は、この出雲の國に、お住まゐるをきめやうと、お思ひになつて、方々、おさがしになりました所、丁度、須賀といふ土地へいらつしやいました。

命はそこが、大變に御氣に召されました。

そして、

「こゝへ来て、實に氣持がせい／＼した」

とおつしやつて、早速、そこへ、お宮をお作りになりました。

いよく／＼お宮が、すつかり出来上つた時、お宮の屋根の上に、むく／＼と雲が湧いて、幾重にも／＼打、重つて、空へ騰つて行きました。その雲は、いつまでも、命と櫛名田姫とお守りする様に見えました。

命はそのありさまをごんになつて、その雲を、幾重かの垣になぞらへて、次の様な歌をおうたひになりました。



八雲立つ

いづも八重垣妻籠みに

八重垣つくる其の八重垣を

そして櫛名田姫とごいつしよに、むつまじく、そのお宮にお住まるになりました。また、足名椎と手名椎とをおよびになつて、その宮の役人の頭になさいました。

## 第四 裸の兎

須佐之男の命の八代目のお孫さまに、大穴牟遲の命といふ神さまがありました。若くて大變お美しい、また心根もやさしい神様でした。もう一つのお名前を大國主神と申します。

大國主の神には、多勢のご兄弟がありました。これを八十神と申しまして、みんな亂暴で、意地悪で、慾深の神さまでした。そして、おとなしい大國主の命を、いつても、いぢめつけて、勝手なことばかりしておいでになりました。しかし、心の素直なゆたかな御氣象の大國主の命は、こせくとした、八十神たちの意地悪には、ちつともお氣をとめず、さからひもせず、言ふとほりになつていらつしやいました。



そのころ、因幡の國に八上比賣いふ姫がをりました。その姫は、づぬけて美しいお姫さまだつたので、その評判は、遠く、伯耆の國で境してゐる出雲の國までも打ち響いて居りました。

八十神たちは、その評判をおき、になると、てんでんに、我れこそ八上比賣のお婿さまにならうと、お思ひになつて、一同つれだつて、因幡の國へお出かけになることになりました。

いよくお出かけになるとき、八十神は、大國主の神に、大きな袋を背負はせ、お供として、随つてくる様にお命じになりました。

大國主の神は、大きな袋をかついて、八十神たちの後からついておいでになりました。八十神はめい々に、八上比賣のことを一心を考へながら、因幡の國をさして御出發になりました。

さて、その頃、隱岐の島といふ島に、一匹の白兔が住んで居りました。毎日、野や山を遊びまはつたり、また海べへ出てきて遊んで居りましたが、何しろ一人ぼつちなので、遊んでゐても、さびしくて仕様がありません。

お天氣のよい時、海べへ來てみると、廣々とした海原をへだて、向うには、美しい山や、陸地が見えます。それは因幡の國でした。それが或るときには、霞の中にぼつととして見えたり、或る時には、はつきりと、手で觸つて見られると思ふほど、よく見えることもありました。

春になりました。ほんのりと青みかゝつた、眠つてゐる様な山の姿が、海の向ふに毎日の様に見えます。

白兔は、けふもまた、海べに立つて、あの美しい因幡の國へ行つて見たいなあと思ひました。きつと、美しい花や小鳥もたくさんゐるし、遊んでくれるお友達もたくさん



んゐるにちがひない。

かう思ふと兎は矢も楯もたまりません。何とかとして、因幡の國へ渡ることは出来ないかしら。しかし遊ぶことは、出来ないし、お舟はなし、困つたなあと、兎は大變しよげて居りましたが、ふとそばを見ると、自分が時たま、友達にしてゐる海の鰐が砂の上に寝そべつてゐます。

兎は一策を思ひつきました。

「おい鰐さん、お前さんは、此の廣い海に住んでおいてだが、お友達はいくらもゐないんだらうねえ」

と白兎が言つたのです。

鰐は、もの憂い顔をおこすと、

「なに——」

と言つた様な目つきを、小さな、目ぶたの間からのぞかせながら、兎を見ました。

「さうだらう、鰐さん。かう見えても、わたしの仲間は方々にたんとゐるんだよ。お前の仲間より、よつほど多いんだよ」

鰐は、憤然として起きあがりました。そして、とんがつた口をひらいて、どなる様に言ひました。

「生意氣なことを言ふな。お前の仲間なんかより、俺の仲間の方が、よつほど多いのだぞ。この海のなかに、どんなにたくさんのお鰐がゐるか、お前は知らないのだらう。

可哀想な奴だなあ」

と、とがつた口を尙ひらいて、カラ／＼と笑ひました。

兎は、にこ／＼として、

「偽だらう」



その愛くるしい目は、光り澄んだまゝじつと、鰐のしよぼくした目を、覗きこみました。

鰐はむきになつて、

「よし、偽と思ふなら、俺の仲間を見せてやらうか。いつだつて見せてやれるんだから」

と言ひました。

兎は、しめたと思ひましたが、顔にも出さず、

「ほんたうかい。ぢやあ、お前が勝つか、わたしが勝つか勝負をして見やう。どうだい、お前さんの仲間を、この海べから、向うに見える因幡の國までつなげることが出来るかい。もし出来たら、一体何匹ゐるか、わたしが數へて見やうと思ふんだがね」と言ひました。

鰐は、

「お安いご用だ。俺の言つたことが偽か、ほんとか見るがい、」

とぶん／＼言つたかと思ふと、其のまゝ海の中へもぐつて行きました。

しばらくすると、海の上には、何萬匹とも知れないたくさんの鰐が、うよく／＼と浮び上つて、たちまちの内に、隱岐の島から、一列の鰐の行列が、廣い／＼海の上を、はてしもなく横切つて、はるか因幡の國までつながつてしまひました。

流石の白兎もびつくりして見てゐますと、先頭にゐたさつきの鰐が、

「どうだ。俺の仲間だけで、因幡の國へとゞいたぞ。どうだ、降参か」

と鼻たか／＼と言ひました。

白兎はくす／＼笑ひながら、

「しかし一匹々々かぞへて見なくちや分らないや」



と言ひました。

『いくらでも、かぞへて見ろ』

兎は、しめたとばかり、

『よしきた。では、いち／＼かぞへて行くから、みんな、ぢつとしてゐるのだよ』

と言ひ捨て、早速、先頭の鰐の背中に、飛び上ると、一い、二う、三い、とかぞへながら、びよん／＼と、身軽に、鰐から鰐へと、傳つて、とんで行きました。

そして、何千匹、何萬匹とかぞへた後、白兎は、いよいよ、目指す因幡の波打ちぎはまでやつてきました。

後、一匹で、いよく陸へ上れるときに、白兎はたうとう、がまんしきれずに、ぶつとふき出して、

『鰐の馬鹿やい。だまされたとは知らずたうとうわたしを、因幡へ渡してくれたね』

とあざけりました。そして

『馬鹿鰐さん、いや、どうも有り難う』

と捨舍詞を言つたまゝ、陸にとび上らうとした時、怒つたのは、鰐です。最後にゐた鰐がいさなり、陸へ上つて逃げやうとする兎をつかまへて、ふさ／＼と白い毛が生えてゐた着物を、すつかり剥ぎとつてしまひました。

兎は、罪のむくい、とら／＼赤裸にされてしまひ、寒くて仕方がありませんでしなけれども、どうともすることも出来ず、砂の上に身を伏せて、慄えながら、めそ／＼と泣いて居りました。

さて、お話は前に戻つて八十神と大國主の神は、出雲を御出立になり、伯耆の國をお通りになつて、因幡の國へおはひりになつてました。大國主の命は相變らず袋を重さ



うにかついで、八十神にずつと後れていらつしやいます。

は八十神たちは、八上比賣のゐる所が近くなつてきたものですから、しきりに、さ  
ぎながらおいでになりました。丁度、因幡の國の海岸にさしか、つた時、砂の上に、  
一匹の赤裸の兎が、泣きながら、ころげ苦しんでゐます。

八十神たちは、もの珍らしげに、そばへよつていらつしやると、兎に、

『おい、お前に毛を生やしてやらうかな。まづ、海の水によく浸つて、それからあの  
山のとつぺんへ上つて行つて、風に吹かれてごらん。きつと生へるから』  
と面白半分の出鱈目をおつしやいました。

しかし、何も知らない兎は、お禮を申上げて、早速、潮水につかると、そのまゝ、  
お山のとつぺんに上つて行つて、ひゆうくと吹く風に、身をさらしました。

ところが、大變です、毛が生へるところか、風で潮水がすつかり乾くと、ぴりく

と、肌がひどいひびの様に裂けて、その痛むこと、言つたらありません。

そして体中、眞赤に腫れ上つてしまつて、兎はもう泣くにも泣けず、ほとんど虫  
の息でゐました。

ところへ、袋を背負つて通りかゝつた神さまがあります。言ふまでもなく、大國主  
の命です。

命は、兎をごらんになると、可哀想に思召しになり、

『お前はまあ、一体どうしたのだ。さぞ痛むことだろう。譯をはなして見なさい』  
とものやさしく、おたづねになりました。

兎は、以前の神たちとちがつて、親切な命のお言葉をきくと、非常に心強く思ひ、  
鱈をだまして、毛をむしり取られたことから、また、八十神に教へられた通りにした  
ら、かへつて、尙苦しくなつたことなどを申し上げ、



『どうぞ、あはれと思召して、助けて下さいませ。もう決して、ひとをだましたりはいたしませんから』

と、お願いいたしました。

大國主の命は、

『それでは、今直ぐあすこの川口へ行つて、眞水で、潮をすつかり洗ひ落すがよい。それから、岸に生えてゐる蒲の花を取つて来て、それを布團の様に、一杯に敷いて、その上でお前がころがるのだ。さうすれば、きつと元の様になる。やつてごらん』とお教へになりました。

兎は、早速、その通りにいたしましたして、蒲の花の上で、ころがると、嘘の様に、体の傷は治つてしまひ、元の様な、白い美しい毛が生へました。

白兎は、うれしくてたまりません。何べんもく大國主の命にお禮を申し上げました。

そして、最後に命に、

『あの八十神たちは、いくらさわいても、八上比賣をお嫁にすることは出来ません。八上比賣は、必ずく、袋を背負つた、あなた様のお嫁になると仰言るにちがひありません。御恩がへしとして、私はこれだけ申上げておきます。お信じ下さいませ』と申上げました。

大國主の命は、白兎とお別れになりましたして、また、例の重い袋を背負つて、せつせと、八十神たちのおあとを追つて、いらつしやいました。



第五 赤い猪

八十神たちは、漸く、八上比賣のお邸へお着きになりました。そして、めいめいが僕のお嫁になれ、お嫁になれと、つめよりますと、八上比賣は、落ちつきはらつて、言ひました。

「わたくしは、どなたにも、お随ひ申すことは出来ませぬ」

八十神たちは、おやくくと、お互ひにつまらなさうな顔を見合せました。

すると、八上比賣は、その美しい目を、後の方に袋をかついて、一人しよんぼりと立つておいてになる大國主の命におむけになつて、

「わたくしは、あすこにいらつしやる大國主の命のお嫁になりたうございます」

とおつしやつたのです。

八十神たちは、あいた口がふさがりませぬ。そして八上比賣に、ことはられたばかりか、今まで馬鹿にしてゐた大國主の命にとられてしまつたのですから、残念で残念でたまりませぬ。

憎い奴は、大國主の命だ。腹いせにあいつを、ひとつ殺してしまはう、と心のよくない八十神たちは、こつそり相談なすつて、其の手筈をおきめになりました。

みんなは、伯耆の國の手間の山といふ山の麓においてになると、大國主の命に、「この山には、赤い猪がゐるのだ。今、わたしたちが、この山の上から、その猪を追つばらふから、お前は下にゐて、その猪をつかまへるのだぞ。もし、逃がしたら、お前を殺してしまふから」

とお命じになりました。みんなの悪だくみを露知らない、大國主の命は、命ぜられ



た通り、たつた一人、山の麓に残つて、今かくくと、赤い猪の、かけ下りてくるのを待つておいてになりました。

八十神たちは、山の上に、おのぼりになると、猪の格好をした大石を、お探しになり、それを、火で、かつかとお焼きになりました。そして、その石が、火に焼けて真赤になつた時分、その石を、山の上から、ごろくと、ころがり落としました。

大國主の命は、のがさじと、赤い猪に、すばやく組みついたとき、それは、火の様に真赤に焼け透つた石。

ひとたまりもなく、大國主の命の体は、ぢりくくと、猪ならぬ焼石のはだに焼きついてしまひました。

そして、そのまゝ、焼け死んでおしまひになりました。それをごらんになつた命の阿母さまは、大變に、お悲しみになつて、泣きながら、

高天が原にのぼつていらつしやいまして、神産巢日の神に、いのちを助けてやつてくれと、お願ひになりました。

すると、神産巢日の神は蚌貝比賣といふ赤貝と、蛤貝比賣といふ蛤とをおつかはしになりました。

二人の貝は、ご命令を奉じて、地上に下りてきました。まづ、赤貝は、自分の貝殻を削つて黒焼にすると、蛤は、水を出して、その黒焼を、どろくとお乳の様にこね、それを大國主の命のお体に、塗りました。

すると、見るく、さしもの大火傷も、あとかたもなくなほつて、命は元の美しい若い姿になつて、ひよつこり起き上りました。そして、そのまゝ、いつもとちつとも變らずに、すたくとお歩きになりました。

八十神は、これを見てすつかり驚いてしまひました。こんどは、山へのぼつて、大



きな一本の木を見つけ、これを根のところから、切りまげ、その大きな裂け目に、楔をぼんと打ちこんで、其の間に、人が這入れる様にしておきました。さうしておいてまた、大國主の命をだまからかして、つれてくると、その木の裂け目に、入れてしまひました。そして、いきなり楔をはづしてしまひましたから、可哀相に大國主の命はその大木に挿み殺されてしまひました。

八十神は、今度はもう大丈夫だと、勝どきをあげて、去つておしまひになりました。大國主の命の阿母さまは、いくら経つても、命が歸ついらつしやらないので、大變ご心配になつて、探してお歩るさになると、今言つた様な始末です。

泣きく、命を、木の裂け目からお出しになつて、一生懸命に御介抱になりますと御心が透つたものか、命は漸く息をお吹きかへしになりました。

すると、阿母さまは、命に、

「お前は、いつまでも、此處に愚圖々々してゐると、しまひには、八十神のために、ほんたうに殺されてしまふ」

と仰言つて、紀伊の國の、大屋毘古の神といふ神さまの許に、おやりになりました。ところが、これを知つた八十神は、命のおあとを追ひかけてきて、命は、また危く殺されさうになりましたが、やつこのことのがれて、お母さまのお家に戻つていらつしやいました。

お母さまは、

「では、こんどは、根の堅洲の國にいらつしやる、須佐之男の命を、訪ねて行きなさい。さつと、よい智慧を授けて下さるから」

と仰せになりました。

大國主の命は、阿母様の仰言つたとほり、いよく根の堅洲の國をさして、お旅立



ちになりました。

いよく、須佐之男の命の御殿へお着きになりましたして、お玄關から、案内を乞ひますと、中から、一人の、美しい、お姫さまが出ていらつしやいました。それは、須佐之男の命の御娘で、須世里比賣とおつしやるお姫さまです。須世里比賣は、玄關に出ていらつしやると、見知らぬ、若い神が立つていらつしやいます、そして、それは大變に、美しい、ものやさしい方なので、姫はおよろこびになりましたして、ねんごろに、おもてなしになると、奥へお歸りになつて、お父さまに、

『只今、大變に、美しい神が、お見えになりました』

と申し上げました。須佐之男の命は、早速出ていらしつてごらんになりますと、

『あゝ、これは、大國主の命といふ神だ』  
と仰言つて、奥へお呼び入れになりました。

須佐之男の命は、なにしろ、武勇の神さまですから、この美しい、大國主の命が、どれだけに強いのか、試して見やうと、お思ひになりましたして、まづ命を、蛇の飼つてある、蛇の室に、寝させました。

すると、その時、須世里比賣が、こつそりと、蛇の振物といふ秘密の寶物をお渡しになつて、命の耳もとにお口をよせて、

『もし、蛇が、食ひつきにまゐりましたら、この寶を、三度お振り下さいませ。蛇はきつと逃げてしまひますから』

とおつしやいました。

大國主の命は、いよく、蛇の室に、お這入りになりますと、うよくくと、大きな蛇や、小さな蛇が、鎌首を持ち上げ、赤い舌を吐いて、命のまはりに、つめよつてきました。



命は、早速、須世里比賣から貰つた、蛇の振物を、つゞけて三度も振りになりました。すると不思議、蛇どもはみんな、こそくと逃げ出して、隅の方へ、ちつとかたまつたきり、ちつともよつてきませんでした。おかげで、命は、其の晩、樂々と、蛇の室でおやすみになることが出来ました。

翌日、須佐之男の命は、大國主の命が平氣であるのをごらんになると、今度は、吳公と、蜂の室に寝かしました。

その時も、須世里比賣は、大國主の命に、吳公と蜂の振物を、お渡しになりましたので、命は、その晩も、樂々と、室の中でおやすみになりました。

須佐之男の命は、一寸、お驚きになりましたが、今度は、命をお連れになつて、野原へお出ましになりました。そして、弓に鏑矢をお番へになると、びゆうと、空高くお放ちになりました。矢は目にも止まらぬ速さで、斜に大空を切つて行きましたが、

やがて、身の丈よりも高い草が、茫茫と生へひろがつてゐる、原の真中に、落ちこみました。

須佐之男の命は、大國主の命を、おかへり見になつて、

『今の矢を拾つてこい』

とお命じになりました。大國主の神が、かしこまりましたと、草を分け分け矢をさがしに這入つておいでになると、須佐之男の命は、その野のまはりに、ぐるりと火をつけて、どん／＼お焼き立てになりました。火は、恐ろしい勢で、大きな草をべろ／＼となめながら、四方から、原の真中にせまつて行きました。

さあ、草のまんかに、矢をさがしにもぐりこんだ大國主の命は、どこへも逃げる事が出来ません。火はだんだん四方からせまつてくる、今にも焼き殺されさうになつた時、丁度、命が立つてゐらつしやる足許に、どこからともなく、一匹の鼠が、ち



よこ／＼やつて来て、

「内はほらく」

外はすぶ／＼」

と言つたのです。ほらくといふのは、がらんどろになつて、穴いてゐる、といふことなのです。すぶ／＼とは、狭くてゐられない、といふことなのです。

命は、必死の間に、この鼠の言葉を、お聞きとりになると、いきなり、足を揚げてとん／＼と土をお踏みになりました。すると、その土の下は洞穴になつてゐて、上の土が、ばさつと落ちると同時に、大國主の命の体も、一緒に、其の穴の中に落ちこみました。で、命は、其の穴の中に、身をひそめていらつしやると、火はどんどん燃えながら、上を通つて行つてしまひましたので、命は、危い命を取りとめました。火がとほつてしまふと、さつきの鼠が、例の鏑矢を喰はへて、ちよこ／＼と走つて

来たかと思ふと、命の前に矢をおいて、そのまゝどこかへ行つてしまひました。その矢を、取り上げてごらんになると、矢の羽が、みんなむしり取られた様になつてゐます。これは、鼠の子どもが、食べてしまつたのです。

さて、こちらは、須世里比賣です。火は見る／＼内に野原に燃えひろがつてしまつたので、大國主の命は、焼け死んでしまつたものとお思ひになつて、泣く／＼、お葬らひの道具をお持ちになつて、死骸を探しに、お出になりました。また、お父さまの須佐之男の命も、大國主の命は、死んだものと、思召しになつて、出かけていらつしやいました。

すると、豈はからんや、びん／＼と、生きた大國主の命が、矢を手握つて、焼跡の原から出ていらつしやいました。

これには、須世里比賣は勿論、須佐之男の命も、びつくりいたしました。



須世里比賣が、およろこびになるひまもなく、須佐之男の命は、大國主の命を、大廣間に、お呼び入れになり、

「おれの頭の虱を取つてくれ」

と仰言つて、横におなりになりました。

見ると、茫々とした長い髪の毛の中には、虱でなくたくさんの呉公があるのです。

すると、須世理比賣は、直ぐさま、棕の實と赤土とを取つて、いらしつて、そつと命にお渡しになりました。そこで、大國主の命は、棕の實を、嚙みくだけ、赤土を嚙みとかし、いち／＼須佐之男の命の前に、ぶつぶつと、お吐きになりました。

須佐之男の命は、これをごらんになつて、

「感心にも、呉公を嚙み殺してゐるな」

と思ひになると、そのまゝ、すや／＼と、お眠りになりました。

大國主の命は、須佐之男の命が、お眠りになつたのを見ますと、愚圖／＼しては居られないと、逃げ出す用意をなさいました。

まづ、寝ていらつしやる、命の、長い髪の毛を、室中の椽へ引つ張つて、しつかりと結びつけてしまひました。さうしておいて、室の戸口の外に、大きな、大きな岩を引ずつてきて、戸のあかない様にしておくと、其のまゝ、須世理比賣を背中におぶひ須佐之男の命の太刀、弓矢、また須世理比賣の琴を、一束にして、小脇にかゝへ、一目散にお逃げになりました。

ところが、逃げだす途端に、抱へてゐた琴が立木に當つて、ぢやらぢやらん、と大きな音をたてたのです。

須佐之男の命は、其の物音に、びつくりなさつて、起き上る拍子に、髪の毛をむすんでおいた椽が、みんな引つばられて、お室はたちまち、めり／＼と、つぶれ倒れて



しまひました。所が、髪の毛が、椽に結はひつけてあるので、いちくくそれを、ほどいておいてになる間に、大國主の命は、足にまかせて、どんくお逃げになりました。須佐之男の命は、後れて、追ひかけなさいましたが、黄泉比良坂まで、いらつしやると、はるか遠くに逃げておいてになる、大國主の命を、お呼びとめになつて、聲たからかに、

「おい。お前は、その持つてゐる太刀と、弓矢で、お前を苦しめた兄弟どもを、片つぱしから征伐してしまへ。そして、お前が、この國の頭となつて、宇迦の山の麓に御殿を立て、治める。娘の須世理比賣は、お前のお嫁だ。どうだ、わかつたか」と實もある、花もあるお言葉を賜はりました。

大國主の命は、須佐之男の命と、お別れして、其の太刀と、弓矢でもつて、八十神を追ひ拂ひ、逃げるのを、ひとり残らず、お退治になりました。あるものは、坂の端まで追ひつめられて、殺されたり、あるものは、逃げるところがなくて、河の中に落ちて、死んでしまひました。

そこで、大國主の命は、須佐之男の命の、仰言つたやうに、宇迦山の麓に、御殿をお建てになり、須世理比賣とご一緒に、お住まゐになりました。

大國主の命は、八上比賣のことを、思ひ出しになつて、別に御殿をたて、お呼びになりました。八上比賣は、早速、よろこんで御出でになりましたが、大國主の命にはもう須世理比賣といふお嫁があつたので、御遠慮なすつて、また、もとの因幡の國のお内にお歸りになりました。

大國主の命は、それから後、大勢のお子さまや、お孫さまをお産みになりました。また、一方に於いては、四方の國々を平らげ、どんくくと國土をおひろげになつて行きました。



或る日のことです。大國主の命は、御大の岬といふ、出雲の國のある海岸に立つていらつしやいますと、波の間から、何ものか、ゆらくと波にゆられながら、近よつてくるものがあります。よくごらんになりますと、それは、が、い、い、も、と、い、ふ、蔓草の茨のお舟に、火取虫の皮をそつくり剥いて作つた着物を着た、それはく、小、さ、な、神、が一人乗つてゐるのです。

命は、びつくりなすつて、其の神に、どなたでございますかと、お尋ねになりましたが何とも、答へがありません。そこで命のお供の神の内、誰か知つてゐるものがあるかと思つて、おたづねになりましたが、誰も知つてゐるものはありません。すると、一匹の蟾蜍が出てまゐりまして、

『それは、久延比古が、きつとよく存じて居ります』  
と申し上げました。久延比古とは、田の中にある案山子の名前でした。そこで、そ

の案山子にお尋ねになると、  
『その神は、高天が原の神産巢日の神のお子さまで、少名比古那の神といふ神さまです』

とお答へいたしました。  
そこで、大國主の命は、高天が原の神産巢日の神にお尋ねになつて見ると、神産巢

日の神は、  
『それは、たしかに、わたしの子だ。わたしの手の指の間から生れた子である。お前は、これから、わたしの子の、少名比古那の神と、兄弟となつて、力を合せ、國を作

りかためてくれ』  
と仰せになりました。  
そこで、二人の神さまは、相並んで國を固め作ることに、お骨折りになりました。



少名比古那の神は、しばらくたつてから大國主の命と、お別れになつて、常世の國といふ、遠い國へ行つておしまひになりました。

大國主の命は、また一人ぼつちになつておしまひになつたので、

「これからさき、どうやつて、國を固めて行つたらよいものだらう。ひとりでは、とてもむつかしいが、誰か、相手になる神はないだらうか。どの神がよいかしらん」

と、御嘆息になつて居りますと、はるか、大海の向うから、波を、さらしく照らしながら、やつてくる神があります。そして、命に近づくと、

「わしをねんごろにもてなしてくるならば、國を固めようといふお前に、力をかして上げやう。お前一人ぢや、とてもだめだ」

とおつしやいました。

命は、早速、ご承知の旨を、お答へになり、

「では、どんな風に、おもてなしたらいいでせうか」

とお尋ねになりました。

その神は、

「大和の國の、三輪山の上に、わしを祀つてくれ」

と仰せになりました。

命は、お言葉通り、三輪山に、其の神を祀つて、共に、國固めの御事業に、力をあつくしになりました。



## 第六 雉のお使

高天が原では、須佐之男の命を、下界へ追ひ下しになつてから、何年か年がたちました。

或る日のこと、天照大御神は、お子さまの天忍穗耳の命を、おそば近くお招きになつて、

『豊葦原の、この日本の國は、お前が知しろしめす國である』

と仰せになつて、高天が原から、下界へ、おつかはしになりました。

天忍穗耳の命は、仰せを承つて、高天が原を御出立になり、例の天の浮橋までお出でになると、そこから、地上を、はるかにお見下ろしになりました。

すると、地上では、大勢の神々が、勢を得て、思ひのまゝの振舞ひをして居ります。

それもその筈、丁度地上では、須佐之男の命の御子孫、大國主の命が、主となつて大勢の神々を引き具し、日本の國を、お治めになつてゐたのですから。

天忍穗耳の命は、これはこのまゝではいけないと、お思ひになつたので、再び、高天が原に、お歸り遊ばして、天照大御神に、

『日本の國は、思ひの外、大勢の、他の神々がはびこつてゐて、このまゝでは、手をつけることが、出来まいと存じます』

と申し上げました。

天照大御神は、高御産巢日の神と、御相談になり、天の安河の河原に、大空の神さまを、ことごとくお集めになると、例の思金の神に、



『この、豊葦原の日本の國は、我が子が治むべき國である。然るに、今、地上には、たくさんの神の一族が、勢力を得て、思ひのまゝの振舞をしてゐる。これを、鎮めるには、一体、どの神をつかはしたらばよいであらうか。お前の考へを、一つ言うて見よ』

と仰せになりました。

すると、思金の神は、大勢の神々に色々御相談になつて居りましたが、やがて、お答へとして、

『天菩比の神がよろしうございます。この神をおつかはしになつたらば如何ですか』と申上げました。

そこで、天菩比の神は、天照大御神の御命令を奉じて、日本の國に、下りていらつしやいました。

ところが、おいてになつたまゝ、さつぱり音沙汰がありません。そのまゝ三年すぎたしまひました。天菩比の神は、大國主の神の、御家來になつてしまつたのです。

そこで、高御産巢日の命と、天照大御神とは、また、大勢の神々に、

『天菩比の神は、三年になつても、まだ何とも言つてこない。今度は、誰れを使ひにやつたらばいいだらうか』

と御相談になりました。

すると、また思金の神が、

『天津國玉の神のお子さまの、天若日子を、おつかはしになつたならば、如何でございますか』

と申上げました。

天若日子は、天照大御神から、立派な弓と、矢とを頂戴して、二度目のお使ひとな



つて、日本の國へお降りになりました。ところが天若日子は、高天が原に、妻も、子どももあるのに、大國主の神の娘の、下照姫をお嫁にもらつて、八年もたつても、高天が原に、何とも御返事をなさいません。天若日子は、御自分が、日本の國を取つてしまはうといふ野心を持つてゐたのです。

高天が原では、そんなことゝは知らず、大御神と、高御産巢日の神とが、また、神々に、

「天若日子も、まだ歸つてこない。一体何をしてゐるのか、誰かを、もう一度やらなくしてはならぬ。今度の使ひは、誰がよいか」と御相談になりました。

すると、例の思金の神が、

「雉名鳴女がよろしうございます」

と申し上げました。これは雉名鳴女といふ名前の、雉のことです。

そこで、天照大御神は、雉名鳴女をお呼びになつて、

「お前はこれから、日本の國へ、下りて行つて、天若日子に、「大御神が天若日子を、おつかはしになつたのは、日本の國に、あばれてゐる神々共を、おとなしく隨はさせる爲であるのに、八年の間も、返事もしないのはどういふ譯であるか」とよくきいておらう」

と仰せになりました。

鳴女は、かしくまりましたと、早速、大空から飛んで下りてまゐりました。そして天若日子のお家の、ご門の中に立つてゐる、一本の香木の木の枝にとまるとお家の中にいらつしやる若日子に向つて、聲をはり上げ、こと細かに、天照大御神の御命令を申しました。



ところが、木の下に、若日子の召使である、佐具賣といふ、あまり心のよくない女が居りまして、鳴女の聲をきくと、若日子をお呼び申して、  
「この木に、いやな鳴聲をする鳥が来てゐます。早く、射殺しておしまひなさい」と申しました。

若日子は、

「よしきた」

と、早速、大御神からいたゞいて来た弓をお出しになり、矢を番へ、木の上にある鳴女をねらつて、びゆうと、お放ちになりました。

矢は忽ち、雉名鳴女の胸にあたると、其のまゝ突きぬけて、大空高くどこまでも、どこまでも飛んで行き、たうとう高天が原に、いらつしやる天照大御神と、高御産巢日の神のおそばに落ちました。

高御産巢日の神は、その矢を、手に取つてごらんになると、矢の羽に血がついてゐます。それは、勿論、殺された雉の血です。

高御産巢日の神は、

「この矢は、八年前に、若日子に、弓と一緒にやつた矢であるが、此の血のついてゐるのは、どうしたのだらう」と仰言つて、其の矢を大勢の神々に見せ、やがて、

「もし、此の矢が、悪い神たちを征伐するために、若日子が射た矢であつたならば、若日子にあたるな。もし若日子が、悪い心を抱いてゐるのならば、若日子を射殺して呉れ」

とお叫びになつて、其の矢が通つて来た、大空の穴から、力一杯にお突き戻しになりました。その矢は、目にも留らぬ速さで、もとの所へ戻つて来ました。丁度仰向



けに寝ていらつしやる、天若日子の胸の真中に、ぐさ、とばかり突き透りました。若日子は、罪もない雉を殺した罪で、あへない最後を遂げてしまひました。

しかし、お可哀想なのは、若日子のお嫁になつた、下照姫です。死骸にとりすがつて、聲をたてて、泣き悲しまれました。

その悲しい聲は、吹き上げてゆく風といつしよに、遠く高天が原まで響いて行きました。これを聞いた、天若日子のお父さまの天津國玉の神、また若日子のほんたうの妻や子どもたちは、若日子の死を知り、驚いて地上に下りてきて、共に泣き悲しみました。

みんなの者は、そこに喪屋といふ、死人を入れておく小屋を作り、其の中へ若日子の死骸を置いて、みんなで死んだ魂を慰めることにいたしました。

そのために、まづ雁を雇つてお供物を捧げる役目をさせ、翠鳥に、お供物にする魚を取つてこさせ、雀にはお米を舂かせました。そして雉を連れてきて、泣き役にして悲しい聲で泣かせ、皆のものはそのまはりて樂器をかき鳴らしながら、夜晝つゞけて八日の間、若日子の魂をとむらつてやりました。

すると八日目の晩に、一人の神がそこへお見えになりました。それは、若日子の死を悔みに來られたのです。

その時、若日子の父の神と、妻子たちが、その神を見ると、まあ不思議、それは、亡くなつた筈の天若日子ではありませんか。

「あゝ、お前は生きて居てくれたのか」

「まあ、あなたは、死んだとばかり思ひましたのに生きてゐて下すつたのですか」と、みんな氣でも狂つた様に、その手足にすがりついて泣き出しました。すると、その若日子であるべき神は、大變に怒り出し、



「おれは、親友が亡くなつたと思へばこそ、悔みに來たのだ。それをなんだつて、おれを、むさくるしい死人と一緒にしたりするのだ」

と、腹立ちまぎれに、劔を抜いて、その小屋を切倒し足でもつて目茶くくに、蹴散らかして、行つてしまひました。

みんなの者は、呆氣に取られて、物も言へません。

それもその筈です。その神といふのは、勿論若日子ではなく、下照姫の兄さんの高日子根の神といふ神で、天若日子に寸分たがはぬほど似ていらしたのです。高日子根の神が行つてしまふと、その後で下照姫が、

「今の神は、私の兄さんで、高日子根の神といふものです」といふ意味を、歌に謡つて、みなのものに教へました。

## 第七 建御雷の神

天若日子は、たうとうあへない最後をとげてしまひました。

これをごらんになりました天照大御神は、

「今度は、誰れをつかはしたらば善いであらうか」

と諸々の神に、お謀りになりました。

思金の神と、すべての神は、

「天の安河の上流の、天の岩屋にゐる、天の尾羽張の神がよろしうございます。てなれば、その子の、建雷の神に、お命じになればよいと思ひます。ですが、尾羽張の神は、天の安河の水を堰いて、道を通れなくしてありますから、滅多な神では、行



くことが出来ません。これには、天の迦久の神をおやりになり、尾羽張の神の返事を  
きいてこさせればよろしうございます』

と申し上げました。

そこで、大御神は、天の迦久の神をお使ひにおやりになりますと、尾羽張の神は、  
『もつたいないこととでございます。早速、お引受けいたしてもよろしうございますけ  
れども、これには、私の子の建御雷の神の方が、もつとお役に立つことゝ存じます  
から、建御雷の神にお役を仰せつけ下さいますやうに』

とかしこまつて申し上げました。

天の迦久の神は、このよしを言上いたしました。

そこで、天照大御神は建御雷神をお召しになり、日本の國へ降つて、その神々  
を取り鎮めてくるやうに、お命じになりました。そして、供人として、天の鳥船の神

をおつけになりました。

二人の神は、はるくと、大空をお降りになり、出雲の國の、伊那佐の濱にお着きに  
なりました。

建御雷の神は、大國主の命に、お會ひになると、お腰の劔をお抜きになつて、波の  
上につき刺し、その前に胡座をおかきになつて、

『お前が、今治めてゐる、葦原の日本の國は、我が天照大御神の御子孫が、お治めに  
なる國である。天照大御神の御命令で、そのよしを傳へに來たのである。潔ぎよく、  
此の國をお返し申すか否か』

と、おごそかにおつしやいました。

すると、大國主の神は、

『もつたいない仰せてございます。ですけれども、私の一存では一寸お答へ出来ま



せんつ 私の子の、事代主の神が、お答へいたすてございませう。が只今漁をしに、御大の崎に行つて居りまして、まだ歸つてこないのてございませう』

と申しました。

そこで建御雷の神は、天の鳥船の神を、御大の崎にやつて、事代主の神をつれてこさせました。

事代主の神は、急いで歸つていらつしやいまして、父の神に、

『恐れ多いこととでございます。此の日本の國は、天照大御神の御子孫に、早速、お返し下さいませ』

と申し上げました。

そして、乗つていらつした、お舟を足で、踏みかたむけると、おまじなひの手拍子をお打ちになりました。

するとお舟は青々とした柴垣になつてしまひました。

事代主の神は、その柴垣の中に、御隠居なすつてしまひました。

そこで、建御雷の神は、大國主の神に、

『お前の子の、事代主の神は、仰せに従ふ旨を申したが、ほかにまだ、相談すべき子があつたのか』

とお尋ねになりました。大國主の神は、

『も一人、建御名方の神があります。これだけでございませう』  
とお答へいたしました。

その時に、向うから、千人もかゝつて、やつと動くといふ、大きな岩を、手に差し上げた、建御名方の神があらはれ、大聲で、

『誰だ。此の國へ来て、ひそくと、御託をならべてゐるのは。おれと、力競べをし



やう。まづ、その手を出せ』

と、怒鳴り上げると、いきなり、建御雷の神のお手を取らうとしました。

すると、急に、建御雷の神の手が氷の柱になつてしまひました。

あつと驚くひまもなく、今度は劔になつてしまひました。

これには、流石の建御名方の神も、怖じけがついて、尻ごみをしたとき、

『今度は、おれの番だ』

と建御雷の神は建御名方の神の手をつかむが早いか、若輩でも取るように、ちざり

取り、向うへぽんと投げ棄てしまひました。

建御名方の神は、はじめの勢は、どこへやら、青くなつて、踵をかへして、ど

ん／＼逃げ出しました。

建御雷の神は、これを追つかけて、たうとう、信濃の國の諏訪の湖まで、追ひつ

め、こゝで殺さうとなさいますと、建御名方の神は、

『恐れ入りました。どうか命はお助け下さい。わたくしは、もうこれから、信濃の國

から外へは、一步も出ません。父、大國主の申す通り、また兄の事代主の神の申す通

り、此の日本の國は、大御神の御子孫に、返上いたします』

と申上げて、降参してしまひました。

建御雷の神は、これをお許しになつて、再び、出雲の大國主の神の處に、お戻りに

なり、

『お前の、二人の子たちは、仰せに従ふと申上げたが、もうこれと言ふことはないか』

とお問ひになりました。

大國主の神は、

『私に、何の異存がございませう。それでは、此の日本の國はお返しいたします。た



「一つ御願ひがございませうが、それは大御神の御子孫がお建て遊ばす様な御殿、太い柱で、氷木を高くつけた御殿をお建て下さつて、わたくしをそこへ祀つて下さいませんでせうか。さうして下されば、私は遠い國へまゐつて、いつまでも、御子孫に、及ばずながら、お仕へいたします。まだほかに、大勢の子どもがありますが、これはみな、事代主の命の言ふことをさしますから、そむく様なことはございせん」と申し上げました。

そして、その場で、潔ぎよく、自ら死んでおしまひになりました。今申上げた、遠い國、黄泉の國へお出でになつたのです。建御雷の神は、大國主の神の御頼み通りに、早速、多藝之の濱に、立派な御殿をたて、お祀りいたしました。そして、櫛八玉の神を、お供物を料理する、料理人になさりました。

櫛八玉の神は、仰せを承はると、早速、鵜になつて、海の底にもぐつて行つて、底の土と、またそこに生えてゐる、二種類の海草を取つてきました。

海底の土では、たくさんのお皿を作りました、また、一つ、海草の莖で、燧白といふものを作り、もう一つ、海草で、燧杵といふものを作り、此の二つのもので、お料理をする火をこしらへました。

そして、建御雷の神に

「此の火を焚きまして、いつでも、そこいらが煤で黒くなつてゐるやうに、また、地面の下の方の岩まで焼き透るやうに、いつも景氣よく、盛んにお料理をいたします。又、漁師が取ってくる、大鱸をたくさんに、お料理をして、お供物に差し上げます」と申し上げました。

そこで、建御雷の神は、再び、高天が原にお歸りになり、天照大御神に、



『日本の國は、ことごとく平らぎました』  
と、具さに奏し上げました。

## 第八 三種の神器

天照大御神と、高御産巢日の神とは、長い間の御心配ごとが、建御雷の神のお骨折  
て首尾よく解決いたしましたので、再びお子さまの天の忍穂耳の命をお召しになり、  
「やうやく、日本の國も、もとくどほり、鎮つたから、かねて言つてある通り、  
お前は、これから大空を下つて、日本の國を治めよ」  
と仰せになりました。

命は、かしてまゐりまして、いよく高天が原御出立の用意をなさいました。其の時  
丁度、身重であつたお妃の豊秋津師姫が、お子さまをお生みになりました、お生れに  
なつたお子さまは、お二人の男の神さまで、天の火明の命に、邇々藝の命といふ神さ



まです。取り別け、邇々藝の命は、大變に立派な神さまだったので、天の忍穗耳の命は、天照大御神に、

『私は、仰せの通り、高天が原を出立しやうと、用意をいたしました時に、丁度子どもが生まれました。其の内て邇々藝の命は、大變にすぐれた神であります。私の代りに、この子を日本におつかはしになつたらばよいかと思はれます。御聞き下さいませうか』

と御願ひいたしました。

天照大御神は、邇々藝の命をごらんになると、如何にも立派な神であるので、よろし、といふお許しがありました。

邇々藝の命は、また、く間に御成人なさいましたので、天照御大神は、改めて、命に、

『お前が行つて、日本の國を治めよ』

とお言葉を賜りました。邇々藝の命は、忝なく思召になり、

『承知いたしました。ございます』

とお引受けいたしました。

いよく、邇々藝の命が、お出かけにならうとした時、高天が原のお道すじに當つて、晃々と、光りを放つ、一人の神があらはれました。まぶしいその光りは、高天が原は勿論、はるか下の方にある、日本の國にまで、明るく照り渡つてゐるのです。

これを、こちらにいらして、御覽になつた天照大御神と、高御産巢日の神とは、天の宇受賣の命を、お呼びになつて、

『お前は、女ながら、中々しつかりした者である。あの道すじにあらはれた、光つた神のところへ出かけて行つて、大御神の御子孫のお出でになる道を何故に邪魔するの



か、きびしくかけ合つてこら』

と仰せになりました。

宇受賣の命が、出かけて行つて、問ひつめると、その神は、

「私は、下界に住るをいたす、猿田彦の神と申すものでございます。けふ實は、天照大御神のお孫さまが、高天が原をお立ちになるといふことをきゝまして、及ばずながら、御案内申上げやうと思つて、只今、お迎へに上つたのでございます」と丁寧ていねいに申上げました。

天照大御神は、これをお聞きになると、感心かんしんな奴だと、直ぐにお許しになり、高天が原からも、天の兒屋根の命、布戸玉の命、天の宇受賣の命、石許理戸賣の命、玉の祖の命の、五人の神々を、お伴ともにつけて、おつかはしになりました。

いよく、お別れになるとき、天照大御神は、例の八尺の勾玉と、八咫の鏡、それ

から、須佐之男の命が、八俣の大蛇の尾の中からお取りになつた、鋭い劍、この三つの寶物を、お紀念として、命におさづけになつて、

「この鏡は、わたしの紀念として、お前に授けるのだから、わたしを見るのと同じよ

うに、この鏡を、大切に祀つておいてくれ』

と仰せになりました。

そして、更にお心添へとして、天の石門別の神に、力の強い手力男の神、そして智

慧袋の思金の神をおつけ添へになり、思金の神に、

「この鏡は、お前の役目として、怠らず、お祀をせよ』

と御命じになりました。

この勾玉と、鏡と、劍の三つの寶を三種の神器と申しまして、今尙、我が國に傳はつて居ります。



さて、いよく、邇々藝の命は、御命令を奉じて、大空のお住居をお出ましになりました。

天の忍日の命と、天津久米の命といふ、きつい神さまが、岩で作つたやなぐひを背負ひ、大太刀をはき、強弓を抱へ、矢をたばさんで、堂々とお先拂ひをしながら、お進みになると、それについて、諸々の勇ましい神々は、邇々藝の命をまん中にいたじき、固めさびしく、むくくと湧き重なつてゐる大雲小雲を、いくつとなく押し分け押し分け、大空の道をお通りになり、天の浮橋をも渡つて、いよく、日本の國近く降りてまゐりました。

まづ、御到着になつたところは、日向の國の、櫛布留嶽といふ、険しい山のいたゞきです。

その山をお下りになると、そこには、茫々とした、平野がひろがつてゐます。

御同勢は、そこを横切つて、ある海へ出ました。こゝは、笠砂の岬といふところでした。

邇々藝の命は、そこへお着きになると、

『こゝには、真向うに、朝日がさすし、夕日も、明るく照つてくれる。實に、よい國である』

と仰言つて、其の處に、御殿をお立てになり、お住居になることになりました。

そこで、命は、例の道案内をした猿田彦の神に、厚くお禮を仰言つて、色々とお勞らひなさつてから、宇受賣の命に、

『猿田彦の神には、色々骨を折らした。今歸るといふのだが、お前は、猿田彦の神とは、最初からの近づきであるのだから、一緒に送つて行つてやるがよい。そして、その手柄を長く紀念するために、猿田彦といふ名前をお前がとつて、これからお仕へせよ』



と申されました。

この猿田彦の命は、後に伊勢の阿坂といふところに、住んでゐましたが、或る日、海で漁をしてゐる時、比良夫貝といふ大きな貝に、手をはさまれ、たうとう海へはまつて溺れて死んでしまひました。

天の宇受賣の命は、猿田彦の神を送り届けると、再び笠砂の御殿へ歸つてまゐりました。そして、海にゐるお魚たちを、大きな小さいのみんな呼び集めて、

「こらく、お前たちは、これから大空の神さまの御子孫に、よくお仕へ申すかどうだ」

と問ひました。

すると、魚どもは、みんな、宇受賣の命に口を向けて、

「はい、お仕へいたします」

と聲を揃へて申しました。

ところがその中に、たつた一匹、返事をしないものがありました。それは海鼠でした。

すると、宇受賣の命は怒つて、

「不屈者、返事をしないのは、此の口か」

といふが早いか、いきなり懐剣を抜いて、海鼠の口をぐいと、えぐつてしまひました。

ですから、海鼠の口はいまだに裂けて居るのです。

さて、邇々藝の命は、笠砂の御殿にお住居になり、日本の國をお治めになつてゐられました。或る日のこと、御殿のそばを、御散歩なすつていらつしやると、一人の大變に美しい少女にお遇ひになりました。



邇々藝の命は、大變にその少女が御氣に召したので、なれくしく、

「お前は誰の娘かな」

とお尋ねになりました。

少女は、恥かしさうに、

「わたくしは、大山津見の神といふ者の娘で、木花咲耶比賣と申します」

と御返事申上げました。

すると命は、

「お前は姉妹があるのか」

とお尋ねになりました。

「石長比賣といふ姉がごいます」

と少女がお答へいたしますと、命は、

「わたしは、お前をお嫁にしたいと思ふがどうだ」とお問ひになりました。

すると、木花咲耶比賣と申上げた例の少女は、

「その御返事は、私には申上げかねます。どうぞ父の大山津見の神にお尋ね下さいませ。父はきつとお答へいたすてございませう」

と申上げました。

命は、早速この事を大山津見の神に申込みになりますと、大山津見の神は、大變お

よろこびになり、姉妹の石長比賣と一緒につけ、たくさんのお土産の品々を積んで、

木花咲耶比賣をお嫁に差し上げました。

ところが、姉妹の石長比賣は木花咲耶比賣とまるで反対、姿色が大變に悪かつたの

ですから、命はお嫌ひ遊ばして、咲耶比賣の方だけを、御殿に残し、石長比賣は、大



山津見の神のもとに返しておしまひになりました。

大山津見の神は、石長比賣が歸つて來たので、大變恥かしくお思ひになり、命に、手紙で、

「わたくしが、娘二人を揃へて差し上げましたのは、姉の石長比賣の方は、其の名前の意味の様に、どんなに雨風にさらされても、いつまでも變りのない岩の様に命が續く様、又、木花咲耶比賣の方は、花が咲き盛るように、華やかに、盛んにおいて遊ばす様、この二つの心をこめて差し上げましたのです。それなのに、木花咲耶比賣だけを留め、石長比賣をお返しになつたのでは、代々の御子孫のお命も、華やかではあつて、永くは續くかどうか、誠に危ぶまれます』  
と残念さうに言つてよこしました。

間もなく、木花咲耶比賣は身重になられて、今にもお子様がお生れさうになりました。

そこで、比賣は命に、

「お腹の子どもが生れさうになりました。けれどもこの子どもは、大空の神のお子さまでございますから、勝手にお産みするのは悪いと存じます。あなたに御相談申し上げます』

と申し上げました。

ところが命は、あんまり早いので、びつくりなさつて、

「そんなに早く、神の子が生れる筈はない。それは我が神の子ではあるまい。さつとほかの子だらう』

と仰せになりました。

咲耶比賣は、



『決して、そんなことはございませぬ。もし、お腹の子が、神の子でなかつたら、あなたのお子さまでなかつたら、きつと、樂にお産が出来るきづかひはありません。神のお子さまならば、どんなことをしても安産が出来ます』

と申上げて、四方に出口のない家を、わざ／＼お作りになり、其の中にお這ひになり、隙間々々をみんな土で塗りふさいでしまひ、いよく／＼お産をなさるといふ時にその家に火をつけさして、まはりから、どん／＼燃やさせました。

しかし、木花咲耶比賣は、こんな苦しい中にあつて、樂々と、火の燃えてゐる間にお産をなさいました。

生れ出たお子さまは、火照の命、火須世理の命、それに火遠理の命といふ三人の神々でありました。

やはり、木花咲耶比賣が申上げたとおり、神のお子さまでありました。

### 第九 満潮の玉と干潮の玉

邇々藝の命の三人のお子さま、火照の命、火須世理の命、火遠理の命は、虫けもなく御成人になりました。

一番上の兄さんの、火照の命は、釣りがお上手で、毎日海へお出ましになつては、大きな魚、小さな魚を何尾となく漁をなさいました。ですから人々は、火照の命のことを、海大盡とお呼び申してゐました。

また、一番末の弟様の火遠理の命は、山で獵をなさることが、お上手で、いつても山へはひつては、たくさんのお獣をお取りになつてゐました。人々は、火遠理の命のことを山大盡と呼んでゐました。



ところが、或る時、火遠理の命は、かう年百年中、山の臘ばかりしてゐるのも面白くないから、一つ兄さんと仕事を變へてやつて見やうと思ひ立ちになり、火照の命に、

『わたしは、しばらく海の漁をして見度いと思ひますから、兄さんの釣鉤を一つ貸して下さいませんか。その代りに、私の弓矢をお貸ししますから、兄さんは山の獵をなすつて下さい』

と御願ひして見ました。

しかし、兄さんの、火照の命は、厭だとかぶりを横にふつて、承知しませんでした。三度もつゞけて、頼んで見ましたが、火照の命は、諾とおつしやいません。それでも貸してくれ〜と迫るものですから、たうとう火照の命は、お使ひになつてゐる鉤を火遠理の命に、お貸しになりました。

火遠理の命はよろこんで海へ出かけ、釣鉤を垂れて、今か〜と、お魚がかゝるのを待つておいてになりましたが、いつかなかゝりません。朝から晩までかゝつて一匹も釣れないのです。そして、しまひに、一寸した機會で、兄さまから借りていらした魚鉤を海の中へ落としてしまひました。

さあ、火遠理の命は、御心配になつて、一生懸命になつて、鉤を探しましたが、何しろ海の中のことですから、見つかりつゝありません。

火遠理の命は、悄然としてお歸りになりました。

すると、兄さんの火照の命は、これも何の獲物なしに歸つていらつしやいました。火遠理の命は、失くした魚鉤のことを申上げて、どうか許して下さいと、お許しを乞ひました。

ところが火照の命は、どうしてもお許しになりません。仕方なく、お腰に下げてい



らつしやる劍を、こまかにお割りになり、五百本の鈎を作り上げ、それを差し上げてこれて許して下さいとお頼みになりましたが、火照の命は、お許しになりません。今度は、一千本の鈎を作つて差上げましたが、火照の命は元の鈎でなければいやだ仰言つて、其の鈎には、手も觸れません。火遠理の命は困つてしまひました。今更元の鈎がみつかりやうありません、仕方なく、海邊へ出て、ひとりしくくと泣いておいてになりました。

するとそこへ、一人のお爺さんがやつて来て、

『もしく、どうなすつたといふのですか』

と言つて、命のお顔を覗きこむと、

『まあ、あなたは貴い神のお子さま。お泣きになるわけを此の爺やに話してごらんなさいませ』

と親切に申しました。このお爺さんは、鹽土の神といふものです。

命は、

『兄さんの鈎を借りて、海の漁に出かけたところが、お魚は一匹も取れず、おまけにその鈎をなくしてしまつたのです。それでたくさんの鈎を作つて、代りに差上げるから許して下さいといくら頼んでも、元の鈎でなくてはいやだといつて、兄さんは許してくれないのです。だからどうしたらいいか、途方に暮れて泣いてゐたところなの』と打萎れて言ひました。

鹽土の神は、命のおつしやるのをさいいてゐましたがやがてにこくと笑つて、

『まあ、そんなに御心配なさいませ。今爺やが旨い工夫をしてさし上げますから』と言つて、持つてゐた袋の中から、一本の櫛を出しそれを向うへさつと投げつける、そこには、青々とした青竹林が出来ました。



すると、鹽土の神は、その中から一番よい竹を切つて来て、忽ちの内に小舟の形をした籠を編んでしまひました。其の籠は、目がちつとすいてゐない、ぎつしりとした籠で、水の上に浮かしても、ちつとも水が洩れてこないのです。

鹽土の神は、其の籠の小舟を、海に浮かせると、命をさし招き、

『さあ、火遠理の命さま、此のお舟にお乗り下さい。今私が此の舟を沖の方へ押し流しますから、しばらくぢつとしていらつしやいませ。さうしてゐるとぢきによい路がありますから、その路をたどつていらつしやい。すると魚の鱗でもつて組み立てた様な格好の、立派な御殿にお着きになります。さうしたら、御殿の門の所に井戸があつて、その井戸の上に香木の木が、掩ひ茂つてゐますから、その木に昇つて、その井戸の丁度眞上になる枝に腰をかけて待つておいてになるのです。さうしてゐれば、海神のお姫さまがぢきに見つけて、きつとよいお話があるに相違ございませぬ』

と申し上げました。

命は、鹽土の神に押し流されたまゝ、しばらくぢつとしておいてになると、よい路がありました。その路をいらつしやいますと、成程立派な御殿があり、御門の所を見ると井戸があつて、其の上に香木の木が掩かぶさつてゐます。

命は早速、鹽土の神の言つたとほり、眞上の枝に腰を下ろして、下へ来る人を今かくと待つておいてになりました。

すると、御殿の中から、海神のお姫さまの、お召し使ひの女が、玉で作つた器を持ち、水を汲みに井戸へやつてきました。召使が、水を汲まうと、ふと井戸を覗くと、暗い水の面に、大變美しい男の神がはつきり映つてゐるではありませんか。女は驚いて、香木の木を見上げる途端、

「水を一杯呉れ」



と命は木の枝にのつたまゝおつしやいました。

召使の女が、器に水を盛つて差し出しますと、命は、其の水をお飲みにはならず、首飾にしていらした玉を口にお含みになり、なみくくと水のたゝへてゐる器の真中へ静かにお落としになりました。

すると、その玉は、器の底に固くくつゝいてしまつてどうしても離れません。

仕方なく、女は器をそのまゝ海神のお姫さまに奉りました。

お姫さまは、器の底にくつゝいてゐる玉を一目ごらんになると、其の召使に、

『門の外に、誰れか来てやしないか』

とお尋ねになりました。

召使の女は、

『井戸の上の香木の木に誰だか腰をかけて居ります。大變美しい男の神で、こゝの海

神さまにもまさつたお立派な方です。わたくしに水を呉れとおつしやつたので、汲んで差し上げますと、この玉を口へ入れてお吐きになつたのです。さうすると、どうしてもこの玉が離れませんので、そのまゝお姫さまに差し上げた次第でございます』

と答へました。

そこで、お姫さまは誰だらうとお思ひになつて、門の外に出てごらんになると、成程香木の木の上に若い、美しい神がゐます。大變にお慕はしくお思ひになつて、早速父の神に、

『門のところ立派な方がお見えになつてゐます』

と申されました。

この美しいお姫さまは、豊玉媛といふお姫さまです。

そこで父の海神も出て來られました。火遠理の命をごらんになると、



「あゝこれは貴い、大空の神のお子さまだ」

とおつしやつて、早速御殿の中にお連れ申し、美智といふ立派な毛皮を八枚敷き更にその上に絹の敷物を八枚重ねて、其の上に命をお据え申し、様々の御馳走をし、珍らしい品々を奉りしました。

其の上、海神は、美しい豊玉媛を、お妃として、火遠理の命に差し上げました。

火遠理の命は、美しい豊玉媛をお妃とし、あまたの家来や、召使ひに待づかれて、面白く、可笑しく、海の御殿で三年といふ月日を過しておしまひなさいました。

三年たつた或日のことです。火遠理の命は、何かの拍子に、今まで忘れていらした兄さんの釣鉤のことをふと思ひ出しになりました。

命は、明るい日面から、急に暗い谷底へ落ちた様なお心持になつてしまひました。そして暗い顔つきをなさつてため息を一つなさつたのです。

これをお聞きになつたのは、おそばにいらした豊玉媛です。大變に御心を痛め、その父の神に、

「私の夫は、三年の間此處にお住まゐになつてため息一つなさいませんでしたのに、けふ深い、ため息をなさいました。何か譯があることと思ひますが、私大變に心配になりますので」

と申し上げになりました。すると父の神は、早速命のそばへいらして、

「けさ娘の話によれば、あなたは何か御心配ごとがあるのか、深いため息をなさつたさうです。三年間、今までなさらなかつた、ため息を、どうしておつきになつたのです。又兼ねなく伺はうと思つて居りましたのですが、あなたがこの海の御殿へわざわざおいでになつたのは、どういふ譯ですか、ひとつお聞かせ下さいませ」

と申し上げました。



そこで、火遠理の命は、海へ落として失くしてしまつた、兄さんの釣鉤のことを、こまかくお話しになり、海神の力で何とかならないものかと仰せになりました。海神はこれをきき、

『よろしうございます。しばらくお待ち下さいまし』

と申上げておいて、それから、海にゐる手下の大小の魚を全部あつめになると、『みんなの内に、火遠理の命の持つておいてになつた釣鉤を取つたものはないか』とお尋ねになりました。

すると、魚どもは、

『さういへば近ごろ鯛が、喉に何か刺さつて、物も食べられずに弱はつて居りますがそれがその釣鉤ではございませんでせうか』と申しのべました。

海神は早速、その鯛の喉を探らせになると、果して一本の釣鉤が出て來ました。火遠理の命は、これをごらんになるとお失くしになつた釣鉤です。

そこで命は、大變にお喜びになつて、これを兄さんの火照の命に返しに御歸りにならうとしました。

すると海神は、

『お別れするのはまことにお名残り惜しいこととありますがいたし方ございません。たゞその釣鉤を兄さまの命にお返しになるときは、ほんくら釣、あはて釣、びい〜釣、ばか釣、と仰言つて、必ず後ろ向きになつて渡しなさいませ。これはおまじなひです。それから、』

と海神は、豊玉媛に何かお命じになつておいて、

『もし、兄さまが、地面の高い所に田をお作りになるやうでしたら、あなたは反對に



低い所に田をお作りなさいませ。もしまた、兄さんが、低い所へお作りになつたら、あなたは高い所にお作りになるのです。さうすれば、私は水を支配してゐる神ですから私はあなたの方の田にばかり水の都合をよくし、兄さまの方はかまはない様になります。さうすれば兄さんの田はお米がちつとも採れず、三年の間には、すつかり貧乏になつてしまひます。これは兄さまへの懲しめです。さうすると、兄さまの命は、きつとあなたの景氣のいゝのを怨んで、攻めてくるにちがひありません。その時には、今さし上げます満潮の玉をお出しになつて、一聲仰言れば忽ち、洪水が押しよせてきて、兄さんを水につゝんで溺らせてしまひます。其の時、兄さんが、助けて呉れとお謝りになつたら、も一つの干潮の玉をお出しになれば、元通り潮が引きます。兄さんが攻めて來たらば、いつでも、この二つの玉で、少しは苦しめてお上げなさいませ』

この時、豊玉媛は、二つの玉を恭々しく、命の前に差し出しました。満潮の玉と、

干潮の玉です。

いよく、火遠理の命は、鉤を持ち、玉を懷に入れて御出立にならうとすると、海神は、鰐どもを多勢お集めになつて、

『今、火遠理の命が、お國へお歸りなされるので、此の内の誰かに、お送りさせやうと思ふのだ、みんな一体幾日で命を御送りして歸つてこられるか』

尋ねました。

すると、鰐どもは、大きいのも小さいのも、それ／＼自分の体に相應して、二日で行つてきますとか、三日で行つてきますとか申しました。するとその内に、丁度、一尋の大きさをもつた鰐が居りまして、

『私は、一日か、れば命をお届けして歸つて來られます』と申しました。



海神は、

『それでは、お前がお送り申せ。しかし途中で、おつかない目をおさせ申してはならんぞ。』

とよくお言ひつけになりました。

一尋鰐は頸の所へ、命をお載せ申し、海原を搔き別け搔き別け、一日の内に無事に日本の國にお届け申しました。

鰐が歸らうとした時、命はおはきになつてゐた短刀をお解きになり、

『これは御褒美だ』

とおつしやつて鰐の頸にくゝしつけておやりになりました。鰐は短刀をいたゞき、そのまゝ海の御殿をさして歸つて行きました。

さて國土にお歸りになつた火遠理の命は、早速、兄さまの所へおいてになつて、海

神が探してくれた鉤をお返しになりました。

その時命は、海神の言つたとほり、兄さんに背中を向け、おまじないの口調で、

ぼんくら鉤

あはて鉤

びい／＼鉤

ばか鉤

とおつしやりながらお渡しになりました。

そして又、海神の言つたとほり、すべて兄さんと反對な所に田をお作りになりました。すると、海神の言つたとほり、兄さんの火照の命の田にはお米がちつとも出来ません。火遠理の命の田は毎年豊作です。

三年たつ内に、火照の命はすつかり貧乏になつてしまひました。反對に火遠理の命



はお金持になられました。

案の條、兄さまの火の命は、これを大層意恨にお思ひになり、たうとう火遠理の命のところへ攻めていらつしやいました。命は驚きません。早速用意の満潮の玉をお出しになると、忽ち大水がやつてきました。火照の命は、逃げるひまなく、あぶくと溺れさうになり、聲を枯らして、助けてくれ、許してくれと御たのみになりました。のて、命は早速干潮の玉をお出しになると、潮は元の様に引いてしまひました。

火照の命は、助かつてほつとなさると、又直ぐに今のことは忘れて、恨んではまた攻めてきました。しかしその度ごとに火遠理の命のために、溺れさうになつては、やつと助けられる。しまひには、流石強情の火照の神もたうとう降参してしまつて、『わたしはこれから、お前の夜晝の番人になつて、何でも言ふことをきくから、これまでのことは許してくれ』。

と頭をお下げになりました。

このことからして、その子孫は、水に溺れかけて苦しんだ火照の命の格好を、身振に真似て、踊をおどるやうになりました。

さて、火遠理の命のお妃である豊玉媛は、夫の命がお歸りになつてしまつたので、一人寂しくお暮しになつて居りましたが、その内に体が身重になつて、お子さまが生まれさうになりました。そこで豊玉媛ははるばると夫の命の國へおいてになり、命に、『私は長い間、身重でございました所、いよく子どもが生れる時になりました。しかしこのお腹の子は、神の子でございますから、海の御殿で生むべきではないと存じまして、おそばへ上りました次第です』

と申上げました。

そこで、火遠理の命は、海邊に産屋を建てさせ、その屋根を、鶉の羽を萱草にして



お茸かせになりました。

ところが、其の屋根がすつかり茸き終へぬ内に、お腹が苦しくなつて、今にも産れさうになりましたので豊玉媛は、其の屋根の出来上らない部屋にお這入りになつてお産をなさいました。いよ／＼お産をなさるといふ時、豊玉媛は、火遠理の命に、

『すべて異つた國の者がお産をする時には、みんな本國の形になつて産むものでございます。私も今、變つた姿でお産をしなければなりませんから、どうぞ其の間、私を御覽にならないで下さいましな』

と固くお頼みになりました。火遠理の命はそれをお聞きになると、かへつて、やたらに見度くなつてしまつたので、たうとうお約束を破つて、隙間からこつそりとごらんになりました。

すると、今まで美しかつた豊玉媛は、八尋もある、大きな大きな鱈になつて、うん／＼苦しみながら、匍ひまはつてゐました。

これには、火遠理の命は、すつかり驚いておしまひになつて、逃げ出してしまひました。

豊玉媛は、これをお知りになり、大變に恥づかしくお思ひになり、子どもを生んでおしまひになると、

『わたくしは、いつまでも海の道を通つて、お目にかゝりに來やうと思つて居ましたのに、あの姿を見られては恥づかしくてもう二度とお目にかゝることは出来ません』とおつしやつて、海の道をすつかりお封じになつて、御殿へお歸りになつてしまひました。

生れたお子さまは、鵜茸草が茸き終らぬ内に生れたので、鵜茸草茸不合の命といふお名前をおつけになりました。



豊玉媛は、海にお歸りになつてから、一方には、お覗きになつた火遠理の命をお恨みになつてもみましたが、また一方には、戀しくてく／＼仕方がないので、たうとうお妹さまの玉依媛を、子どものお守りやお世話をさせる爲に、命のそばへおよこしになりました。その時、豊玉媛は、お心を歌にこめておよこしになりました。

その歌は、

赤玉は

緒さへ光れど

白玉の

君が儀し貴くありけり

といふ歌です。

これは、赤玉といふものは、それを繋いでゐる緒までも赤く光り透いて見えるほど

美しい玉であるけれども、それよりもつとく美しく思はれるものは、白玉のやうに貴いあなたのお姿です、といふ心持なのです。

すると、火遠理の命はお返しのお歌として、

「あの遠いく、海に向ふてお前と仲よく暮したことがあつた。それも昔となつた。

けれども、一生涯いつまでもいつまでもお前を忘れないでゐるよ」

といふ厚いお情をお詠みになつて、豊玉媛の許にお送りになりました。

火遠理の命は、其の後、高千穂の宮といふお宮に、五百八十歳までお住居になつて

居られました。



第十 八咫鳥

鵜草葺不合の命は間もなく御成人遊ばしますと、海神の娘、玉依姫をお妃として高千穂の宮にお父さまのあとをついで、日本の國をお治めになりました。

お妃には、四人のお子さまがありました。五瀬の命、稻氷の命、御毛沼の命、神倭伊波禮日子の命です。

其の内、四番目の神倭伊波禮日子の命は、中でもすぐれて傑い方でした。四人の方は御成人なされると、お父さまのあとをついで、高千穂の宮で、仲よく力を合せて、國の政治をおとりになりました。

しかし、何しろ高千穂の宮は、日本の國からいへばよつぽど端の方の日向の國にあるのですから、遠い、東や、北の方へは中々政がとどきません。

そこで四人の皇子たちは、  
「一体どの邊の所にゐたらば、不公平なく、日本の國を治めることが出来るだらう」と御相談になつた結果、

「此處は日本の國の西の端だ。兎にかくもつと東の方へ行かうてはないか」といふ御意見が出て、みなそれに一致なさいました。

そこで四人の方は御揃ひになつて、高千穂の宮をお出ましになり、御家來の神々を引き連れ、豊前の國の宇佐といふところまでおいでになりました。

すると宇佐には、宇佐都比古といふものと、宇佐都比賣といふものが居りまして、四人の命たちを、大變よろこんで迎へいたしました。立派な御殿をたて、そこで盛な御馳走をいたしました。



宇佐をお出ましになると、筑前の國の岡田といふところへおいてになり、お宮をたて、丁度一年の間お住居になつて居られました。

其の次には安藝の國の多氣理といふ所に七年の間お住居になり、次に吉備の高島にお宮をたて、お住居になりました。

こゝでも尙日本の國の真中にはならないといふので、八年目にまた高島のお宮を御出立になり、お船を仕立て、海路はる／＼とお進みになりました。

命たちのお舟が、速吸門といふ、潮の流の非常に急な海峡にさしかゝつた時、向ふの波の上に、龜の甲に乗つて釣をしてゐる人が、命のお舟を見ては、しきりに袖を振つて何か合圖をしてゐるのです。

これを御覽になつた命たちは、其のものを呼びよせて、お前は誰かとお尋ねになりました。

するとその釣人は、

「私は宇豆比古と申すものでございます。けふこの海峡をお通り遊ばすのを知つて、お迎へにこゝまでまゐりましたのです」

と申し上げました。

命たちは、

「お前は、海の道をよく存じてゐるであらうな」

と仰言ると、

「よく存じて居ります」

と答へました。

そこで命たちは、

「それでは、俺たちの家來になり、道案内をしてくれないか」



とおつしやいますと、宇豆比古は、

『かしまりましてございます。お仕へいたしませう』

と申し上げました。

そこで命たちは、自ら棹を宇豆比古にお差し出しになると、宇豆比古は、その棹を傳つて、首尾よくお舟に乗りこみました。

それをごらんになつて、命たちは、宇豆比古に、棹根津日子といふ名前をつけておやりになりました。

さてそれからは、いよく棹根津日子が水先案内となり、お舟は東へくとずんく進みました。

お舟は、攝津の波速の海を打ち渡り、淀川にはひり、更に大和川を逆上つて、河内の國の白肩といふ舟着場へ到着いたしました。

ところが鳥見といふところに長髓比古といふものが居りまして、此の者が、命たちのおいでになることを知り、兵を連れ、命たちをお打ちしてしまはうと待ちかまへてゐたのです。

命たちが上陸なさらうとすると、長髓比古の軍勢は盛んに矢を放つて攻めて來ました。

命たちは早速、舟の中から楯をお出しになり、矢を防ぎながら、賊軍と勇ましくお戦ひになりました。其の内運悪くも、長髓比古の射た矢が、五瀬の命のお手に刺つてひどくお負傷をなさいました。

五瀬の命は、

『これは悪いことをした。わたしたちは日の神の子孫であるから、お日さまを背中にして、矢を向けなければいけないのに、お日さまを向ふにまはして矢を射てゐる。こ



れては賊のために負傷もする。これから直ぐ引きかへし、まはり路をして、反對の側から、お日さまを背にして賊を攻めやうてはないか』

とおつしやつて、直ぐさまみんなを集め、弟さま方と御一緒に、お舟で南海の方をおまはりになることになりました。

お舟が、茅渚の海といふところを通る時、五瀬の命は、まだ血が止まらないお手の傷を海の水でお洗ひになりました。そこでその海を血沼の海とも書きます。

然し、五瀬の命は、飽くまで御運がないものか、お舟が、和泉の國の男之水門といふところへ来た時、お手の傷が重つてたうとうお崩れになりました。

五瀬の命は、其の時、『奴たちに手傷を負はされて死んでしまふのか。くやしい』

と残念さうにお叫びになつて息をお引き取りになりました。

残るお三方の命は、涙ながらに、お骸を竈山といふところに手厚く葬りました。

お舟はいよく南をさして進み、やがて熊野に到着しようとするときに、海の上に急に、はげしい暴風雨がやつて來ました。命の軍勢のお舟は、木の葉の様に高く揚げ

られたり、深く波の間に落ちたり、今にもひつくり返りさうです。そしてそれがいつやむとも知れませんが。

すると、稻氷の命は大變にお嘆きになつて、『我が母は、海の神である。それなのに、何だつて、我々をこんな苦しめるのか』

とお叫びになると、劍を抜き放ち、そのまゝ、海の中へ、ざぶんと飛びこんでおしまひになりました。

すると御毛沼の命も同じく海の神をお恨みになり、波の上をどん／＼と踏み歩いて遠い／＼常世の國に行つてしまはれました。



こんな風に、またも二人の命を失はれ、今度は、神倭伊波禮日子の命も一人になつてしまひました。しかし、命は、悲しみながらも勇氣を振ひおこし、あらしの海をたうとう乗り切つて、熊野の村に御到着になりました。

命をはじめ、大勢の軍勢が上陸したとき、不意に、山の方から一匹の大熊がかけ下りてきまして、命の兵の前にあらはれたかと思ふと、急に掻き消した様にゐなくなつてしまひました。

と同時に命にはかに、お体が痺れて氣を失つてしまはれました。命の軍勢たちも亦、同じ様に氣を失つてはたたくと倒れ、死んだ様に眠つてしまひました。

これは、大熊の毒氣に中つたのです。その大熊をよこしたのは山の中にある悪神でもあります。

その時、高倉下といふ一人の若者がやつてまゐりまして、ひとふりの太刀を倒れて

ゐらつしやる命のそばに置きました。すると、命は直ぐにお眼ざめになつて、

『おや、これは長寢をしたもんだ』

と、仰言つて元の様なお元氣になられました。その時、高倉下は例の太刀を命に差し上げますと、命はその太刀をお抜きになり、力をこめてお振りになりました。すると、不思議な太刀のため、山の中の悪神どもは、ゐながらにみんな切り殺されてしまひました。それと同時に、命の軍勢も、ことごとく正氣にかへりむくむくと起き上りました。

命は高倉下に其の太刀の由來をおききになると、高倉下はかしこまつて、

『實は私は、昨晩からいふ夢を見たのでございます。それは、高天が原においてなる天照大御神と、高御産巢日の神のお二方が、建御雷の神をお召しになり、葦原の日本國には、今悪神どもがはびこつてゐる。そして、その毒氣のために、我が子孫が



病み伏してゐる。お前はこの前にも日本の國を取り鎮めてきたのだから、今度も降りて行つて、ひとつ悪者どもを平げてきてくれと、仰せになると、建御雷の神は、私がいまありませんでも、私かこの前、葦原の國を鎮めた時に持つて行つた太刀をやれば必ず平らぎますからと仰言つて、私にお向かひになり、「俺はこの太刀を、お前の倉の棟を穿つてそこから落としておくから、あしたの朝、それを持つて、神倭伊波禮日子の命の所へ御届けせよ」と仰言つたのです。かういふ夢を私は見たのです。そしてけさ早く、倉へは入つて見ますと、ちやんとこの太刀が、床の上に倒に刺つて居るのです。かやうな譯で持つて上りましたのです』

と語りました。

神倭伊波禮日子の命は、再び丈夫になつた軍勢をお連れになつて、そこからなほも奥山お進みにならうとした時、ふと青雲の上から、高御産巢日の神のお聲がきこえま

した。つゝしんで、命がお聞きになると、

「お前たちは、こゝより奥へ這入つてはいけなぞ。此の奥には、まだ悪神がたくさんゐる。今天から八咫鳥をつかはすから、それを道案内にして行くがよいぞ』

といふお言葉です。

間もなく、大空の方から八咫鳥が飛んでまゐりまして、命の軍勢を導きくお進めいたしました。そして、吉野川の河口に到着いたしました。

と、その時、吉野川の河瀬に築をかけて魚をとつてゐるものがありました。命は、

「お前は何といふものか』

とお尋ねになると、その者は、

「私は贄持の子といふものでございます』

と申上げて、命の御家來になりました。



しばらくおいてになると、尾の生へた人が、井戸から飛び出して來ました。井戸の水がぴか／＼と光りました。

「お前は誰か」

とお問ひになると、尾のある人間は、

「井氷鹿」

と言つて、これも命の御家來になりました。

なほも進んでいらつしやると今度は重なる岩を押し分けて出て來た人があります。見るとやはり、お尻に尾が生へてゐます。

「お前は誰か」

と仰言いますと、

「私は石押分の子。今度神の御子がお出でになると聞きましたので、お迎へに上りま

した次第でございます」

と申上げました。

命は、これ等のものをお供に加へて、なほも、険しい山路や谷底を下りたり上つたりして、やつと大和の國の宇陀といふところへ御到着になりました。

この宇陀といふところには、兄宇迦斯、弟宇迦斯といふ二人の兄弟が住んで居りました。

神倭伊波禮日子の命は、それをお聞きになると、早速八咫鳥をお使におやりになつて、

「大空の神の子がおいてになつたのだ。お前たちはお仕へするかどうか」と問ひ正させにおやりになりました。

ところが、兄宇迦斯は、鏑矢を射て、八咫鳥を追ひかへしてしまひました。そして



兵を集めて、命のお出になるのを待つて、打ち取つてしまはうとしましたが、思ふ様に手下が集りません。

そこで兄宇迦斯は卑怯にも命を欺し討ちにしやうとたくらみました。それは、大きな御殿を作り、その床を一步踏めば直ぐさま大きな天井が落ちて来て、命を殺してしまはうといふ仕掛なのです。

さうしておいて、兄宇迦斯は、誠にやかに、命をお迎へしたいから是非御殿へお出で下さいと申してまゐりました。弟の弟宇迦斯はしきりに、兄のすることを止めました。たがき、入れません。そこで弟宇迦斯は心配して、そつと、命の許にかけつけて、『私の兄はお使ひを射返した上命を攻めやうとしましたが兵が集りませんので命をお呼びしておいて、釣つた天井を落として殺さうとたくらんで居ります。どうぞ其のおつもりで、お氣を付け遊ませ』

と申上げました。

すると、道の臣の命と、大久米の命といふ大將が、大層怒つて、直ぐさま兄宇迦斯を呼びつけると睨みつけ、

『貴様がつつた御殿の中へはまづ貴様が入つて見て、命にお仕へしやうする心を證據だて、見ろ』

と、大聲をはり上げ、刀の柄へ手をかけ、弓に矢を番へて引きしぼり、いやならば殺してしまふぞと言はぬばかりの權幕です。

兄宇迦斯は逃げるに逃げられず、たうとう恐ろしい御殿の中に一步踏み入りますと忽ち天井が落ちて来て、兄宇迦斯はつぶし殺されてしまひました。

たうとう兄宇迦斯は自分でつた釣天井に殺されてしまつたのです。これも自業自得です。



さて、弟の弟宇迦斯は、それから命をお迎へしまして、状々の御馳走をいたしました。

命ははあよろこびになり、これを部下のものに、みな下さいました。

命は、それよりも尙、奥へお進みになりましたして、忍坂といふ所へお着きになりました。するとそこには、八十建といふ、土の中に住んでゐる、恐ろしい悪者がたくさん居りました。

命は、其の邊は大變に険しい山路であるから、慣ない部下のものに戦ひをさして苦しめるのは損であると思召しになつたので、ある謀りごとをお考へになり、八十建を御馳走にお呼びになりました。八十建がどやどやと御馳走の席につくと、命は、八十建に一人づゝの給仕人をつけさせたのです。此の給仕人には、命が豫め、もし命が合圖の歌をお謡ひになつたらば、一齊に八十建を殺してしまふのだぞ、とお命じにな

つておきました。給仕人はてんでに懐に刀をしのばせておりました。

八十建は、そんなことは夢にも知らず、食つたり、飲んだりしてゐると、命は折を見はからつて、例の合圖の歌をお謡ひになりました。

大勢の給仕人は一齊に刀を抜きはなち、あつと言ふ間に、八十建を一人残らず切り殺してしまひました。

命は、なほも軍勢をはげまし、悪神や、賊共を道々平らげてお進みになりました。そして、大和の鳥見にお近づきになりました。

鳥見には、例の長髓比古が居るのです。神倭伊波禮日子の命は、この長髓比古の爲に、大切なく兄さまの五瀬の命を失はれ、さまざまの御苦勞までもなさり、まことに御無念に思つておいてになりました。

ですから、どうしても今度は、長髓比古を打ち取つて五瀬の命の仇を取らなければ



ならないと、意氣込すさまじく、いよ／＼鳥見の長髓比古をお攻めになりました。

しかし、毎日の行軍で命の軍勢は疲れて居りますし、それに長髓比古の軍勢は中々の多勢なのですから、中々思ふ様には攻め破つて行くことが出来ません。

命は、味方の旗色が悪くなつてくるのをしきりに御心配になり、あせつていらつしやると、或る日のこと、にはかに天が曇つて来て、だん／＼暗くなり、やがてまつ暗になつたかと思ふと、氷雨がばら／＼と激しく降つて来ました。

両方の軍勢も戦ふことが出来ず、鳴りを鎮めてゐると、どこからともなく、金色に光り輝いた鴉が飛んできて、命のお持ちになつてゐた、弓のてつべんに、びつたりと止まりました。

と、忽ち、稻光りの様な鋭い光が、鴉の体からさして、長髓比古の軍勢をぱつと照らしました。

あつ、とばかり賊どもは眼が眩んでまご／＼した時、それつ、と命の軍勢は一度に攻めまくつたので、賊軍は不意を討たれ、打ち亂れて、散り／＼ばら／＼になつて逃げ出しました。

それを追ひかけ／＼、命の軍勢は、何なく大勝利となりました。命は長髓比古を殺さうとなすつて、追ひかけやうとなさつた時、長髓比古の方に神の御子の血脈を受けてゐる邇藝速日の命といふ方が居られて、命の前にお出でになり、天つ日の子孫であるといふ印の品々をお見せ申し、其の上、切つてきた長髓比古の首を奉りました。

神倭伊波禮日子の命は首尾よく、兄さんの仇を報じて、御安心になりました。それから、まだ残つてゐる悪者もすつかりお平らげになりました。

そこで、命は、

『わしが、東の國を征伐しだしてから、もう六年にもなる。そしてその間に、大空の



神々のおかげで、悪さをする神どもや、賊どもも平いだ。まだ國の端の方は、鎮まり切つてはゐないだらうが、真中のこの邊はきれいに鎮つた。これから都をひらき、日本ほんの大きな方針ほうしんとなるべき礎いしづえを作り固めねばならない。また、立派なお宮みやを作つて大空おほぞらから傳へ授かつてゐる三つの寶たから、八咫の鏡やたかみ、八尺の勾玉まがたま、劍つるぎ、をお收めし、お祀まつりをしなければならぬ。これは子孫代々傳へて守つて行かねばならぬことだ』  
と仰せになり、畝傍山の東南にある、樞原といこところにお宮をたて、天皇の位くらにあ着きになり、そこを都とお定めになりました。その日は丁度二月十日でした。  
この神倭伊波禮日子の命が、我が國の一番はじめの天子様、神武天皇であります。  
二月十日の日は、紀元節と申しまして、今尚、日本の國中が上下そろつて、この遠い昔をお祀りするのであります。

## 第十一 沙本媛

神武天皇からかぞへて、丁度十一人目の天子様に、垂仁天皇といふ天子様がございましたが、その天子様に、沙本媛といふお妃がございました。

この沙本媛には沙本日子といふ一人の兄さんがありました。この沙本日子は常々、この日本の國を取つて、自分が一人て威張つて治めてやらうといふ、善からぬ心を抱いて居りました。

或る日のこと、この沙本日子は、妹の沙本媛をそつと呼びよせて、次の様なことをたづねたのです。

「お前は、お前の夫の天皇と、兄さんと、一体どちらが、大切だと思ふかね」



沙本媛には、天皇も大切な大切な夫であるし、沙本日子も、大切な大切な一人の兄でありました。ですから、沙本媛は、どつちが大切といふことは言へない筈だつたのです。所が、兄さんが、どつちだくと詰めよつてきたあまり、つひ、深い考へもな

「それは、兄さんの方が大切です」

と答へてしまひました。

すると、沙本日子は、

「ふむ、さうか」

といつて、しばらく沙本媛の顔をながめてゐましたが、やがて、

「お前がほんとに、わしを大切にと思ふのならば、ひとつ、わしとお前と二人で天下を治めやうと思ふがどうだ」

と言ひました。そして、ひとふりの懐剣を沙本媛の前に出して、

「わしを大切にと思ふのならば、この刀で、天皇の寝ていらつしやる隙をうかがつて刺し殺してしまへ」

と言ふのです。

沙本媛は、はじめて兄さんの恐ろしいたくらみを知つて、びつくり致しましたが、兄さんの方が大切だといつてしまつたので、今更、いやだといふことは出来ません。

泣く／＼媛は、

「承知いたしました」

と仰言つて、其の懐剣を兄さんから受けとつて、お戻りになりました。

媛は、何食はぬ顔をして、天皇の前に侍りました。

天皇は、そんな恐ろしいたくらみを、お妃の沙本媛が沙本日子から命ぜられてきて



ゐるとは、夢にもぞ存じありません。そして其の晩もいつもと同じ様に、睦まじく、沙本媛と四方山のお物語をしていらつしやいましたが、やがて、ねむけがさしになつたので、沙本媛のお膝を、枕にして、横におなりになると、そのまま、いゝ氣持にぐつすりと、おやすみになつてしまひました。

そのとき、沙本媛の手は、懷にある懷劍の柄を、固く握りしめてゐました。

やがて、何も知らずにおよつてゐる天皇の喉の上には、鞘を拂つた懷劍の切尖が逆手に向けられました。

そして白く光つた切尖が天皇の喉に觸れやうとした刹那、沙本媛の手ははげしく震へると同時に、その目からは、熱い涙があふれて、天皇のお顔の上にぽたりと落ちたのです。

懷劍は、かたはらへ投げすてられてしまひました。もとくゝ悪人でない沙本媛に、

どうして、天皇をお殺し申すことが出来ませう。

その時、沙本媛の落した涙に氣付いてふとお眼ざめになつた天皇は突然、

「今俺は、不思議な夢を見た。沙本の村の方から雨がひどく降つてきて、わたしの顔を濡らすと、一匹の錦色をした小蛇が出てきて、わたしの頸に巻きついたのだ。一体これは何の前兆だらう」と仰言つたのです。

沙本媛は、すつかり驚いてしまつてすべてを隠しだてなく白狀してしまひました。

「申譯ございません。實は、兄の沙本日子が先日、私に夫のあなたと、兄と、どちらが大切かと尋ねられました。兄の手前、兄さんの方が大切だと答へました處、俺とお前とて天下を治めやう、夫を殺せ、と言つて、此の懷劍をよこしたのでございます。それを愚にも斷りかねて、今、寢てゐらつしやるあなたを、刺さうといたしましたが



どうしても悲しくて、お殺し申すことが出きません。つひ涙が流れおちて、お顔を汚したわけてございます』

天皇はこれをお聞きになると、びつくりなさいまして、

『さては、あざむかれてゐたのか』

と仰言つて、早速、兵隊をお召しになり、沙本日子を攻め滅ぼしにおつかはしになりました。

其の時、沙本日子は、稻城といふ城に立てこもつて天皇の軍に應戦いたしました。天皇の軍は、ひし／＼と城を取りかこみ、一度におとしてしまはふとした時、妃の沙本媛が、兄の沙本日子のことをお案じになり、そつと脱け出して、稻城の城には入つておしまひになりました。しかも、沙本媛は、其の時お身持ちていらしたのです。天皇はすつかり御心配になりました。沙本媛は、三年もの間御寵愛になつたお妃で

す。其の上、今はお身持ちになつていらつしやるのです。

天皇は、皇后の身の上の事に事があつてはと、稻城の城は取りかこむてゐるだけにし、當分の間ははげしく攻めかけない様に、兵隊にお命じになりました。

幾月も、幾月も、さうしてゐる間に、沙本媛は、たうとうお産をなさいました。

沙本媛は、産まれた御子を、お城の外に、高く差し出し、天皇にお見せして、

『此の御子が、あなたのお子さまだと、お思ひでしたら、どうぞお連れになつて下さいませ』

と申上げました。

天皇は、お子さまは勿論、お妃まで連れてこやうといふお心でしたから、これをごらんになると、家來の中から力の強いものたちをお撰びになり、

『これから行つて、子どもを連れてくるのだが、其の時一緒に母の沙本媛も連れてこ



い。沙本媛が見えたら、其の頭の髪でも、手でも、着物でも、手にふれ次第しつかりつかんで、間違ひなく連れてくるのだぞ』

と申渡されました。力強の家來たちは、かしこまりましたと、直ぐさま稻城の城の直ぐそばまでまゐりました。

處が、沙本媛は、天皇のお心をとづくに御存じになつてゐたので、髪の毛をすつかりお剃りになつて、それを頭の上にかぶせ、また腕かざりの玉の緒を腐らして、それを腕に巻き、また、着物は酒に浸してすつかり腐らしたものを召になりしました。どれでも、引つ張れば直ぐちぎれてしまふやうになつたのです。

さうしてからいよいよ赤ん坊のお子さまを抱いて、城の外に出て、お差し出しになりました。

來てゐた天皇の家來たちは、お子さまを受け取ると同時に、沙本媛をもお連れしや

うとして、いきなり、媛の腕かざりをつかみました。ところが、それは、何の手應へもなく切れてしまひました、召てゐた着物をつかむと、これもぼろ／＼にちぎれてしまひます。これではいけないと、最後に、沙本媛の髪の毛をつかむと、それは、ばさりと取れて落ちてしまひました。其の間に媛はたうとうお城の中へ逃げもどつてしまひました。

家來たちは、お子さまだけを抱いて、すぐ／＼と歸つて來まして、天皇に、

『お子さまはお連れ申しましたが、皇后様は、お連れすることが出来ませんでした。髪の毛も離れてしまひますし、お召し物も、ぼろ／＼と切れてしまひますし、お腕の玉の緒まで、つかんだら切れて、取れてしまつたのでございます』

と申し上げました。

天皇は、大變に残念に思召しになり、お腹いせに、其の腕かざりの玉を作つた玉作



りの人々をお叱りになつた上、持つてゐた領地をみんなお取り上げになつてしまひました。

しかし、天皇は、まだ稻城の城を攻め落としてしまはうとはなさいませんでした。改めて、沙本媛のもとにお使ひをおやりになつて、

『生れた子供の名前といふものは、必ずその母がつけることになつてゐるが、この子は何といふ名前をつけたらばよいか』

とお問合はせになりました。

すると沙本媛は使のものに、

『その御子は、丁度このとりでに火がついて盛に燃えてゐる時に、お生れになつたのであるから火牟智和氣の御子といふお名前をつけたならばよろしいでございます』  
とお言づてになりました。

すると、天皇は再びお使ひをお出しになつて、

『この子を育てるにはどうしたらよいか』

とお尋ねになりました。

沙本媛は、

『お乳を上げるには、乳母をお抱へになるがよろしうございます。またお湯をおつかはせ申す女をもお雇ひになり、それらのものにすべての世話をあまかせになるのがよろしうございます』

と申し上げました。

すると、天皇は三度目のお使ひをお出しになつて、

『それなら、おれの世話は誰れがするのか』  
とお尋ねになりました。



沙本媛は、

「それには、難波といふところに、兄媛弟媛といふ、姉妹の娘がごさいます。このものは立派な家柄の娘でございますから、お召しになつても差支ございません。この二人をお召しなさいませ」

と申されました。天皇は、そのお言葉を使のものからお聞きとりになりますと、すつかり御安心になり、此の上は、もう愚圖愚圖してゐるべきでない、一度に稻城の城を攻め落とすにかゝられました。稻城の城はまた、一面の火となり、沙本日子は、逃げ出すところを、一討ちに討たれてしまいました。

沙本媛は、これを御覧になると、炎々と燃え上る火の中へ飛びこんで、たうとう御最後をお遂げになつてしまいました。

天皇は、やうやく賊軍をお平げになつたので、例の火牟智和氣の御子をお連れにな

り、首尾よく都へ凱旋遊ばしました。



第十二 青葉の山

生れて間もなく、阿母さまのお手をはなれてしまつた火牟智和氣の御子は、お父さまの許で、乳母たちに育てられ日々御成長遊ばしました。

天皇は、この皇子を、それ／＼は可愛がりになつて、わざ／＼この皇子のために尾張の相津に生へてゐた、二俣の大杉を伐つて來させ、それを割り抜いてお舟をお作らせになりました。そして御自分と一緒に皇子を其の舟にのせ、お池の上を漕いで、お遊びになつた位です。

それほど、大切に／＼お育てになつたのに、どうしたものか、この御子は、さつぱりお口がさけないのです。それが、もう大きくおなり遊ばして、一人前の大人として

お鬚が胸先まで垂れる様になつても、ものが言へないのです。

天皇は大變御心配になりました、どうか物を言はして見度いと、國中のありとあらゆるお醫者にお診せになりましたが皇子はどうしても物を仰言ることが出来ません。

天皇は、夜も晝も、誰か皇子の口をさかせるものはないかと、そればかり御案じになつて居られました。

處が或る日のことす。

天皇がこの皇子と、御殿の中でお遊びになつておいてになると、突然御殿の上を、

『ぎーぎー』

と啼きながら、一羽の鶴が飛んで行きました。

すると、皇子は、その聲をお聞きになつたのか、向ふの空へ飛んでゆく鶴を御覽になりながら、はじめて、



『あわわ、あわわ』

と仰言たのです。

さあ、皇子がものを仰言た。はじめて物を仰言た。

天皇のお喜びは一方ではありません。そして早速、山邊大鷹といふものをお召しになり、

『今飛んで行つた鶴を、なんてかても、追つかけて行つて捉へてこ』

とお命じになりました。さうしたなら、皇子はきつと、口がよくきける様になるだらうとお思ひになつたのです。

大鷹はかしまつて、早速其の鶴のあとを追かけました。

鶴は、大和を過ぎ、紀伊を越え、播磨、因幡、丹波、但馬と、飛んで行きました。

大鷹はあとをどん／＼追かけて行きましたが中々つかまれません。其の内に、鶴は、

向きを変へて、東の方に向つて飛んで行きました。今度はのがすものかと、大鷹は一生懸命に追かけ、近江の國、美濃の國、更に信濃の國を経て、越後の國まで追ひつめ和那美之水門といふ所に行つた時、網を張つて、やうやくのことで、其の鶴をつかまへました。

大鷹は、喜び勇んで其の鶴を持ちかへり、天皇に奉りました。天皇は、早速其の鶴を皇子のおそば近くへ飼つて、しきりにお啼かせになりました。

所がかうした折角の苦心も、水の泡、皇子は、いくら其の鶴を御覧になつても、また其の啼きごゑをお聞きになつても、言葉らしい言葉は、さつぱり仰言いません。仰言ることの出来るのは、片言の、

『あわわ』

だけなのです。



天皇はもうがつかりなさつてしまひました。

所が、ある晩のこと、天皇は不思議な夢をござらんになりました。それは、天皇のお夢のなかに神さまの御聲がして、

『わしのお宮を、天皇が住む御殿と同じ様に立派に建てよ。さうするならば、皇子は必ず、ものが言へる様になるであらう』

といふのです。

天皇は、お眼ざめになつてから早速トひをおさせになると、其の夢の中で仰言つた神さまは、出雲の大神、即ち大國主の神であるといふことが解りました。

そこで、天皇は、兎もかくも、火牟智和氣の御子を出雲におやりにやつて、大國主の神の御機嫌伺ひをさせやうとお思ひ立ちになりました。

そこで、皇子の御供には誰がよいかとトひをおさせになると、曙立の王がよろしい

といふことになりました。

天皇は、曙立の王をお召しになり、

『お前は、皇子のお供をして出かける前に、一体、出雲の大神にお詣りしたならば、大神は、皇子の口のきけないのをほんとに直して下さるものかどうか、何かで験して見よ』

と仰せになりました。

曙立の王は、仰せを承つて、鷺巢の池といふ池にお出かけになり、祈りをこめ、『もし出雲の大神にお詣りして、ほんとに効めがあるものならば、この池の樹に住んでゐる鷺を落してみても下さる様に』

と祈りました。すると、不思議、樹にゐた鷺は、ばた／＼とみんな樹から落ちて死んでしまひました。



曙立の王は

『この鷲が、みんな生き返ります様に』

と再び祈りかへしますと、鷲はみんな一度に生きかへつて、また樹に飛んで行きま  
した。

曙立の王は、この鷲と同じ様に、樫の木を、祈つて枯らし、また祈りかへして生き  
かへらしました。

このことを、天皇に申上げると、天皇は、いよく皇子を御出發させることになさ  
いました。そして曙立の王の外に、も一人菟上の王をお供におつけになりました。い  
よく御出發といふ時に、天皇は、御用心深く、どの路をとつて行つたらばよいかと  
トひをおさせになりました。

トひには、奈良山を越える路と逢坂山を越える路とは、途中できつと、跛人と盲人

とに遇つて、縁義がよくない、たゞ眞土山を越えて紀伊に行く路は何事もない、これ  
がよろしいといふことがあらはれました。

で、御一行は、この路をおとりになり、はるくと出雲をさして、御出かけになり  
ました。

いよく出雲の大神の社に、御着きになりますと、本牟智和氣の御子は、お供をし  
たがへ、大神に恭しく、お詣りをいたし、ねんごろに御機嫌を伺ひになりました。

お詣りがすんで、再び都にお歸りになるといふ時、一同のものは、肥の河に橋を渡  
し河のまんなかに假のお宮をたて、差し上げました。皇子は、しばらくの間此の假の  
お宮に、寢起をなすつていらつしやいました。

其の時、此の附近にゐた、岐比作都美といふ郷士が、皇子に御馳走を差し上げやう  
と思ひ、外の景色を添へるために、川下の方に、青葉をたくさんつんで山を作りまし



た。さうして、色々いろくと皇子わうじをおもてなしいたしました。

すると皇子わうじは、此この青葉あをばの山やまをごらんになつて居をられたがにはかに、『河下かはしもに見みえてゐる青い山あをやまは、ほんとの山やまではないだらう。あれは青葉あをばで作つくつた、作りものものの山やまだ。大國主おほくにぬしの神かみをお祀まつりする爲ために、神主かみぬしたちがわざ／＼作つくつたものであるのか』

と、口くちをひらいて、ものを仰言おつしやつたてはありませんか。

さあみんなのものは、夢ゆめかとはかり、驚おどろくやら、喜よろこぶやら、早速さつそく、早馬はやうまを立て、都みやこにいらつしやる天皇てんわうに、このことをお知しらせ申まうしました。

本牟智和氣ほんむちわけの御子みこは、そこの假宮かりみやからひとまづお移うつりになつて、長穗ながほの宮みやにお住すまゐになりました。

皇子わうじは、此このお宮みやで肥長比賣ひながひめといふ媛ひめをお妃きさきになさいました。

處ところが或日あるひ、皇子わうじは、ふと此この肥長比賣ひながひめの正体しょうたいを御覽ごらんになつたのです。肥長比賣ひながひめの正体しょうたいは蛇へびだつたのです。皇子わうじは、びつくりなさつて、後あとをも見みずにお逃にげ出だしになりました。

すると、肥長比賣ひながひめは、哭なき悲かなしんで、皇子わうじのおあとを追おつかけてまゐりました。其その時とき皇子わうじは、すてにお舟ふねで海うみの上うへにお出でかけになつて居ゐられたので、肥長比賣ひながひめは忽たちち海うみに飛とびこみ、蛇へびの正体しょうたいをあらはし、するすると遊あそびながら追おつかけはじめました。すると、海原うなばらは、その蛇へびの光ひかりて、恐おそろしいほど、金色こんじきに輝かき渡わたりました。皇子わうじは、いよく／＼びつくりなすつて、舟ふねに乗のつたまゝ陸をかにお上ありになり、丘をかの上うへをも舟ふねを引ひかせてお越こえになり、命いのちからがら、都みやこへお歸かりになりました。

お父とうさまの天皇てんわうのおよろこびは一方ひとかたではありません。早速さつそく、菟上うながみの王みこを再び出雲いづもへおやりになり、大國主おほくにぬしの神かみの爲ために、立派りつぱなお宮みやをたて、奉たてまつりました。



本牟智和氣の御子は、もう今度は、お口も上手にきくことが出来る、立派な皇子に  
おなりになりました。

### 第十三 倭建の命

垂仁天皇の次の天子様を景行天皇と申し上げます。この天皇は、お身の丈が一丈二  
寸、お脛の長さが四尺一寸もあるといふ大きなお方で、武勇すぐれた天皇でいらつし  
やいました。

この天皇に、二人のお子さまがございました。兄さまの方を大碓之命と申し、弟さま  
の方を小碓命と申し上げました。

其のころ美濃の國を治めてゐる役人で神大根の王といふものの娘に、兄姫弟姫とい  
ふ二人の姉妹がありました。二人とも揃ひも揃つた美しい少女で、其の評判は遠く都  
までも鳴りひびいて居りました。